

【翻訳】

陳望道『修辞学発凡』第八篇 積極修辞四

(附 霍四通「章句上の辞格」の当代における研究の進展)

甲 斐 勝 二 (人文学部教授)
 間 　　ふさ子 (人文学部教授)
 宮 下 尚 子 (共通教育研究センター外国語講師)
 張 　　璐 (福岡大学非常勤講師)
 王 　　毓 雯 (福岡大学非常勤講師)
 霍 　　四 通 (復旦大学中文系副教授)

翻訳にあたって

以前より本学研究所の研究班で継続している陳望道の『修辞学発凡』の共同翻訳を掲載する。『修辞学発凡』についての解説は、これまで提出してきた訳稿に付した前書きや資料を参考にされたい。

既に半世紀以前の著作なので、その後研究も進んでいる事であろうと、今回もまた復旦大学で修辞学を研究されている霍四通先生より現代の修辞学研究からみた一文を寄せていただいている。

「修辞」研究は作品の読解や解釈と密接に関わり、しかも陳望道は、その研究の対象となる作品を中国語文の全般から幅広く扱っている。先秦の古典籍から当時の民間歌謡までと、提示される例文は、今回も時代やジャンルを超えて各種各様である。先行研究に当たる先人の指摘などの文献も古いものが多く、引用文の翻訳には大変苦労した。幸い日本語に既に訳されているものも多々あったので、日訳があればそれを概ね利用させていただいている。参考にしたり利用させていただいたりした翻訳書・注釈書については、先回の掲載から篇末にまとめてあげておくことにした。しかしながら、中にはそのままでは陳望道の修辞解釈がうまく示せないと思われる訳文もあり、そのような部分は陳望道の解釈に沿うように変えたところもある。修辞はそれを用いる言語のもつ表現特徴を利用したものであり、それを生かして翻訳するとなるとどうしても訳文を工夫しなければならなくなるからだ。修辞の特徴をなんとか生かそうと、あれこれ工夫し、訓読形式の訳文体も利用してみたが、その結果奇怪な訓読になってしまったところも出てしまった。ご了解願いたい。それによって理解が果たされればよいのだけれども、却ってわかりにくくなっていることを危惧する。日本語の既訳がないものも多々有り、訳者の力量の

限界により誤訳が多いことが心配である。ご指正下さい。

なお、今回の訳文は主に甲斐・間・宮下が作成し、張・王が原文と訳文の対照検討して修正をし、最終的に甲斐がまとめた。霍先生には解説に代わるものとして、第八章で扱う修辞法について、中国における現在の研究情況を書いていただいている。

陳望道『修辞学発凡』第八篇
(積極修辞四) 翻訳

一 反復

同一語句を用いて、強い心の内を何度も表現すること、これを反復表現と呼ぶ。人は事物に熱く深い感覚を抱くとき、しばしば一度またもう一度、二度三度と繰り返して述べて明らかにしようとするものだが、何度も繰り返して現れるという形式が、あたかも街路に並ぶ樹木や、祝日に並ぶ提灯が見るものに対してしばしば純粋な快感を与えるように、修辞上の反復もまた人間のこのような心理作用に基づいている。

反復表現の使用法は、連続するものと、離れたもの二種類ある。

(一)

私はちょうどこのとき、ちょうどあなたの戯曲を自分の膝の上に広げ、かの、あなたとよく散歩に行った公共墓地の草むらに座って、広々とした初秋の空を仰ぎ見ていた。瞬きひとつせず、瞬きひとつせずに見ながら、自分の今の気持ちと、あなたの童話の中に出て来た若い人物の気持ちとが打ち解け、ぴったりとくっつき、ひとつになったように思う。(魯迅『童話劇「桃色の雲」を読む』)

(二)

公〔訳注：林則徐〕のこのたびの行動、このたび下された決心が、もしこれらの人々により揺らがされ、いささかでも動くことがあれば、この千載一遇の良機は失われて、どのような結果をもたらすかととも
言えません。とても言えません。（龔自珍『送欽差大臣侯官林公序』）

(三)

晨に上る散関山、この路は何と険しいのだろう！
晨に上る散関山、この路は何と険しいのだろう！牛はうずくまり起きようとせず、車は谷底に落ちてしまった。大きな石の上に座り、五絃の琴を弾く。作り為すは清角の韻、心は迷い煩う。歌で気持ちを表す、晨に上る散関山と。

なぜまた導師が、突然私のところへいらしたのか。
なぜまた導師が、突然私のところにいらしたのか。獣の毛皮で身を包み、とても普通の人には見えない。言うには、あなたは何の苦しみがあり自らを怨み、何を求めてさまよい、このようなところまで来たのかと。歌で気持ちを表す、なぜまた導師が、突然私のところにいらしたのかと。

私は崑崙山に住まいする、真人と呼ばれるものだ。
私は崑崙山に住まいする、真人と呼ばれるものだ。道は深くても手に入れることができたなら、有名な山をあまねく見てまわり、宇宙の果てまで気ままに遊びまわり、石を枕とし流れで口を漱ぎ湧き水を飲めるのだという。呻吟思索しても決めかねるうちに、遂に導師は天上に上っていった。歌で気持ちを表す、私は崑崙山に住まいすると。

去り行くものは追うことができず、世事に纏い付
かれることはずっとうらめしい。去り行くものは追
うことができず、世事に纏い付かれることはずっと
うらめしい。毎晩どうしても眠ることができない。失意のうちに自らしみじみとした気持ちになる。齊の桓公は正しくして偽らず、辞賦を歌うものを正しく評価したという。経傳に伝えられるのは、桓公の征西の記事。歌で気持ちを表す、去り行く者は追うことができずと。（曹操『秋胡行』）

(四)

昔、鄭の子産に生きた魚を贈った者がいた。子産は養魚係に池に放つように命じた。ところが養魚係は池に放たずに煮て食べてしまい、子産には、「池に放ちましたところ、はじめのうちはこわばって動けずにおりましたが、やがてゆるゆると泳ぎ出し、ゆったりと深みに消えて行きました」と報告した。子産は、「それはよかった、それはよかった」と言った。（『孟子』万章上）

以上が連続の反復である。

(五)

野草は、根が深くなく、花や葉が美しくはないが、それでも露を吸い、水を吸い、死人の血と肉を吸い、それぞれに自分の生存を獲得する。生存のときは踏みにじられ、刈り取られて、ついには死滅して腐朽するにいたる。

だが、わたしの心は晴れやかで、愉快だ。わたしは大いに笑い、歌を歌うだろう。

わたしはわたしの野草を愛する。だが、わたしは野草を装飾とする地面を憎む。地火は地下に運行し、奔騰する。溶岩がひとたび噴出すれば、いっさいの野草、および喬木を焼きつくすだろう。かくて、腐朽さえない。

だが、わたしの心は晴れやかで、愉快だ。わたしは大いに笑い、歌を歌うだろう。（魯迅『野草』題辭）

(六)

まず浦口の山から峯が起こって、ここに墩、ここに砲（訳注：墩も砲もいずれも地相の術語で隆起した地形をさし、砲がやや小さい）、ここに墩、ここに砲、ここに墩、ここに砲、そしてうねうねとまがり、ゴロゴロとつづいて、そのままどっと押し出てくる。押し出てきて、この県の周家岡になり、竜の身体のような起伏が峽に落ち込んできて、そこを横ぎると、また、ここに墩、ここに砲、それからゴロゴロと数十もの砲がかさねりつづいて、一つの墓所の形を作っているのです。この墓所の地形を「水から出た蓮の花」というのです。（『儒林外史』第四十五回）

(七)

血で書かれた大きな文字が
ゆがんで南京路に横たわる
この忘れられない日を
一年に一度飾り立て……

血で書かれた大きな文字が
千万の叫びを刻んでいる
この忘れられない日を
幾万もの心霊は激怒し……

血で書かれた大きな文字が
衝突の経過を記録している
この忘れられない日を
多くの裏切り者がほくそえんでいる

五月三十日の事件よ
立ち上がり 南京路を行け
お前の血の光芒を天の果まで放て
お前の剛健な姿を黄浦江の入り口に映せ
お前の大鐘のような予言で宇宙を揺り動かせ
（殷夫『血字』）

(八)

黄鵠空高く飛ぶに 中途に留まり徘徊する
懐中では車輪が回るよう 誰を思っていることかあ
あなたは分かるか

黄鵠空高く飛ぶに 途中で巡り悲しげに泣く
長い間群れから迷い 生き別れに心が傷む
黄鵠空高く飛ぶに 羽をふるって風と争うよう
に戻る

高く翔んで天帝の居場所まで 時がくれば雲と共に
降りてくる

黄鵠空高く飛ぶに 途中で裏の渚に戻る
飛び立とうとして飛び立たず 悲しげに泣いて
仲間を探す

(「黄鵠曲」)

これらが離れた反復である。

二 対偶

語りの中で同じ字数で、句型も似る二句を使い、対を作って並べ効果を上げるものはみな対偶とよぶ。対偶の修辞法は、その形式の面から見ると、そもそも、句調での反復ともいえる。したがって、反復修辞法に入れてしまう人もいる。一方その内容から見ると、互いに反対の意味を持つ二つの事柄を用いて対照的に際立たせた方が、劉勰が「相反する内容を使って対を作る反対が優れ、同じ内容を使って作る正対が劣る」(『文心雕龍』麗辞)と言うように高く評価されるものなので、対照修辞法¹に入れる人もいる。しかしながら、対偶が成立するのは、形式の面からすると一般美学上の所謂対称に他ならないし、内容の面でも全く対照的な句作りのみでできているわけではないので、反復や対照に入れてしまうのはあまり適切には思われない。よって、ここでは旧式に従って独立させておく。

この修辞法の例を以下にあげる。

(一)

眉を横にして冷やかに対す千夫の指
首を俯けて甘んじて為す孺子の牛(魯迅「自嘲」詩)

(二)

事は四方に在り、要は中央に在り(『韓非子』揚榷)

(三)

満は損を招き 謙は益を受く (『尚書』大禹謨)

(四)

有情の皮肉、無情の杖子(『水滸伝』第六十一回²)

(五)

白髪は情無く老境に侵り、青灯は味有り児時に似る(陸游「秋夜読書」詩)

(六)

生なれば則ち天下が歌い、死すれば則ち天下が哭す(『荀子』解蔽)

(七)

烈士 暮年、壮心 不已(曹操『歩出夏門行』龜雖寿)

(八)

千里の目を窮むるを欲して 一層の樓を上るを更にす(王之渙「登鶴雀樓」詩)

(九)

幽谷より出て 喬木へと遷る(『詩経』小雅・伐木)

(十)

爾を誨すこと諄諄 我を聴くこと藐藐(『詩経』大雅・抑)

例を見れば、対偶は対照的なものばかりではないのが分かる。ここでは(七)(八)(九)(十)の四例は内容が続くものであって、対照するものではない。

この修辞法はかつて奇妙な形で発達した時期があった。唐の劉知幾が「その文作りといえば、概ねが字句を単独では使わず二つにし、長短をそろえ対偶を整える。従って、一句で言えることも二句にし、三句で言えることも、必ず四句にする」(『史通』叙事)というようなのである。「五四」運動の盛んな頃でも、無理に対偶を使って判決文を書いたり電報を打つ人がまだいて、非常に不自然に思われたものである。従って、当時の文化・学术界が『新青年』上で文学革命を唱えたとき、この現象に対して厳しい議論を行ったことがある。当時は、対偶に反対した人もいたし、対偶にするかしないかは、自然に任せるのが良いと考える人もいたのだった。(『新青年』第二巻・三巻を参照)

三 排比

同じ範囲で同じ性質の事象について同様な構成で一つ一つ表出するもの、これを排比という。排比と対偶は、よく似たところがあるが、やはり違いがある。(一)対偶は文字数が同じでなければならないが、排比はそれには拘らない。(二)対偶は必ず互いに対とならねばならないが、排比はこれもどうでも良い。(三)対偶では文字や意味が同じものを極力避けようとするが、排比では文字や意味が同じものを用いるのが通常の状態である。以下に実例を挙げる。

(一)

王は書の黄帝顓頊の言を聞き、惕若としておそれおののき、退いて戒書をつくる。日常座している席の

¹ 対照修辞法：原文「映襯格」、対照的なものを並べて互いにひきたてあう修辞法。

² 通行本では第六十二回に見える。

四端に銘を刻む。机に銘を刻む。鑑に銘を刻む。盥盤に銘を刻む。楹に銘を刻む。杖に銘を刻む。帯に銘を刻む。履屨に銘を刻む。觴豆に銘を刻む。戸に銘を刻む。牖に銘を刻む。劍に銘を刻む。弓に銘を刻む。矛に銘を刻む

(『大戴礼記』武王踐阼 王とは周の武王のこと、書とは先に出ている丹書のこと)

(二)

可哀想でたまらぬというあわれみの心のない者は人間ではない。不全を恥じてにくむ心のない者は人間ではない。自分をさしおいて人に譲る心のない者は人間ではない。是非を判別する心のない者は人間ではない。(『孟子』公孫丑上)

(三)

友よ、私は信じる。その時がくれば、至る所全ていきいきとした創造が行われ、至る所全て日進月歩の進歩が見られ、喜びの歌が悲しみの歌にとってかわるだろう、笑顔が泣き顔にとってかわるだろう、豊かさが貧しさにとってかわるだろう、健康が病苦にとってかわるだろう、知恵が愚かさにとってかわるだろう、友愛が憎悪にとってかわるだろう、生きる喜びが死の悲しみにとってかわるだろう、風光明媚な花園が、さびしい荒地にとってかわるだろう！この時、我ら民族は後悔なしに人類の前に立つことができ、我々を育ててくれた母親も、最も美しく飾りはじめもするだろうし、世界のあらゆる母親と平等に手を携えることになるだろう。(方志敏『可愛的中国』)

(四)

高祖は言った。「公は、その一を知って、まだその二を知らない。そもそも、籌策を本陣の帷帳の中でめぐらし、その結果、勝ちを千里の外に決する点では、わしは子房(張良)におよばない。国家を鎮め、人民をなづけ、食糧を供給して糧道を絶たない点では、わしは蕭何におよばない。百万の軍をつらねて、戦えばかならず勝ち、攻めればかならず取るという点では、わたしは韓信におよばない。この三人はみな人傑である。わたしは、この三人をよく用いることができた。これが、わしが天下を取った所以だ。項羽にはただ一人の范増があったが、それを十分に用いることができなかった。これが、わがとりことなった所以なのだ」。(『史記』高祖本紀)

(五)

天変は畏れる足らず、祖宗は法の^{のつと}に足らず、人言は恤^{うれ}うに足らず。(王安石の言葉、『宋史』王安石伝に見える)

(六)

する気がなければ完成せず、求めようとしなければ手にはいらず、留まろうとしなければ長くは居れ

ず、進まねば戻ることはできない。(『管子』牧民)(七)

天にもし情があれば、天もまた老いるであろう、春にもし気持ちがあれば、春もまた痩せるにちがいない。雲は無心というけれども、雲さえも愁を生ずるものだ。(喬孟符『揚州夢』雜劇第一折)

これらの排比は概ね二つに分けられる。一つは本来はまとめて言えるのだが、わざわざ列挙する、例(一)、例(二)のようなものである。もう一つが、そもそも並べて挙げるしかできないもので、(三)(四)(五)(六)(七)などの例がそうである。第一類では例(一)は本来「席、机、鑑……に銘を刻んだ」書けるのだが、ここではわざわざ「武王が日常座している席の四端に銘を刻む、机に銘を刻む」云々と書いている。その目的は概ねの所列挙するそれぞれのものがそれぞれ十分な注意を促させる所にある。また事態に緊急性があって、まとめてあっさり伝えるわけにはいかない語りの中で使うには都合が良い。しかし、前人にはこれらの目的や情況に目を向けなかったからであろうか、この種の排比に対して大いに排斥を加えた者がいた。

(八)

季孫行父は禿、晉却克はやぶにらみ、衛孫良夫は足をひきずっており、曹公子手は背中が曲がっていた。同時に齊に呼ばれた。齊では禿頭に禿頭の御者をさせ、やぶにらみの者にやぶにらみの者の御者をさせ、足を引きずる者に足を引きずる者の御者をさせ、背中が曲がっている者に背中が曲がっている者の御者をさせた。(『穀梁伝』成公元年)

唐の劉知幾がこれに対して、あまりに余計なものが多すぎる、「禿頭」以下の各文をとってしまい、「それぞれの類にはそれぞれの類で対応した」とすべきだと言ったのである(『史通』叙事)。しかし、このような簡潔主義は、断固として人々を納得させるものではない。従って劉知幾の言葉を、明の魏際瑞が批判して、そうすれば確かに簡潔は簡潔だ、しかし、「ちっとも生命力が無くなってしまふ」ではないか、と言っている(『伯子論文』)。第二類は、これまで問題になったことはないので、ここで詳しく語る必要は無い。しかし、排比全般について、前人が語ったある点については、いささか注意しておいた方が良いかもしれない。それは、この排比には往々にして各文の中に同じ文字が加えられているという点である。従って、宋の陳騫以下しばしばこの点的を絞った議論がでていて、「文章の中の幾つかの文に同類の文字を用いるのは、文の勢いを元気づけ、文意を広げるためである」(『文則』卷下庚条)など言うのである。「同類の文字」を用いる実際の例は、以下の通り。

(九)

学ば弗^らる事有り、之を学んでよくせ弗^らんば措^か弗^らる也、問わ弗^らる事有り之れを問いて知ら弗^らんば措^か弗^らる也。思わ弗^らる事有り、之を思いて得弗^らずんば措^か弗^らる也。弁ぜ弗^らる事有り、之を弁じて明らかなら弗^られば措^か弗^らる也、行わ弗^らる事有り、之を行いて篤から弗^らんば措^か弗^らる也。（『中庸』）

それぞれの文に同じ「之」「弗」「也」の文字があるのは、排比の修辭法にしばしば見られるものなのだけれども、それはしかし排比の中の一つの現象に過ぎない。この現象の実例については『文則』の中で多くのものが挙げられているのから、ここで更に並べないことにしよう。

排比法には、ただ二つの文で排比するものもある。対偶と極めてよく似ているので、対偶を参照するのがよい。

(十)

私が想う人は、遠い遠い所にいる。私が心を動かした事は、深く深く懐中にむすぼれる（白居易「夜雨」詩）

(十一)

弓を引くなら強い弓を引け。矢を用いるなら長い矢を用いよ。人を射るにはまず馬を射よ、敵をとりこにするにはまず王をとりこにするのだ。（杜甫「前出塞」九首之六）

四 層遞

層遞とは言葉の配列が次第に深くなるように、次第に高くなるように、次第に大きくなるように、次第に重くなるように、だんだんと累進的に進んでいく修辭法である。それが成り立つには、以下の要素が必要である。(一)述べようとするものが二種以上の事柄である事、(二)それらの事柄に軽重大小など比較できるところがある事、しかも(三)比較できる部分には一定の段階があることだ。例えば、

(一)

天の時も地の利に及ばず、地の利も人の和には及ばない。（『孟子』公孫丑下）

(二)

国の作壹をなすこと一年なら、十年、国は強くなるし、作壹を十年行くと百年の間、強いであろう。これを百年も続ければ、千年の間、強いであろう。千年強いということになれば、王となる。（『商君書』農戰 作壹は、統一された耕作と戦争政策を実現すること）

(三)

まだ聞かないのは聞いて知っているのに及ばない。聞いて知っているのは見て知っているのに及ばない。見て知っているのは理解して知っているのに及ばない。理解して知っているのは実践して真に体得

するのに及ばない。（『荀子』儒效）

(四)

人として一番重要なのは先祖を汚されないこと、その次が自分の身体を汚されないこと、その次が自分の表情の如何によって侮辱されないこと、その次が自分の言葉の如何によって侮辱されないこと、その次が手足を縛られるなどして卑しめられること、その次が囚人の服装をさせられて卑しめられること、その次が足かせをつけられむちうちの刑をうけて卑しめられること、その次が頭を剃られ首かせをつけられて卑しめられること、その次が皮膚を傷つけられ四肢を斬られて卑しめられること、もっとも下等なのが腐刑である。（司馬遷『報任少卿書』）

以上の四例は(一)は三段階、(二)(三)は五段階、(四)は十段階で、ともに一段目から二段目、二段目から三段目、軽小なものから重大なものへと、陳騷の所謂「上下つぎつぎに接続し、あたかも踵を継ぐよう」（『文則』卷上丁）で、最後の第四例は、腐刑が最も辱めの高いものであることを述べるために、辱めない点から説き起こし、四段階進むと、こんどは辱めを受ける点を段階的に述べる。それらの目的は読者や聞き手に次第に頂点に達するような感覚を持たせることにある。

層遞法の中には大から小へ、重から軽へ向かうような用法もあるという人もいる。例えば、

(五)

およそ花というものは、一年にただ一度咲くだけであって、四季の中のただ一つの季節を、その一つの季節の中でもただ数日を占めるだけである。三つの季節のつれなさを耐えしのんだあげく、ようやくその数日の風光を勝ち得るのだ。（『今古奇観』卷八）

しかしながら、この例は実際は軽から重に向かう層進なのである。なぜならば、わずか数日の大切さを言うために、一年の四季から説き起こすからである。もし、大から小へ、重から軽へと並べようとするならば、それは逆層遞にはかならず、層進用法を逆さにつかう特殊な修辭法なのである。例えば、

(六)

孫子曰く——総じて戦争のやりかたというものは——敵の国を丸ごと降服させるのが上で、敵国を撃破して勝つのはその次である。敵の全軍を丸ごと降服させるのが上で、撃破して勝つのはその次である。敵の旅団を丸ごと降服させるのが上で、撃破して勝つのはその次である。敵の大隊を丸ごと降伏させるのが上で、撃破して勝つのはその次である、敵の小隊を丸ごと降伏させるのが上で、撃破して勝つのはその次である——というわけで、百回戦って百回とも全部勝つというのは最高のよいやりかたではな

い。戦わずに敵の軍隊を屈服させることこそ、最高の良いやりかたなのである。(『孫子』謀攻)

更に以下に引く例で、趙の威后が歳、民、王で行った逆層進は、人々に疑問を持たせ、議論を起こさせようとするためのものなのである。

(七)

齊王は使者を出して趙の威後のきげんをうかがわせた。手紙の封を切らないままで、威后は使者に問われた。「作物も順調ですか。人民にも変わりはありませんか。王様にもお変わりありませんか」使者は不愉快に思って、「臣はお使いを仰せつかって威后さまのもとへ参りました。ところが今、王のことをお尋ねにならず、まず作物と人民とのことをお尋ねです。どうして卑しいものを先にして尊いものをあとになさいますか」と言った。威后は言った、「そうではない。もしも作物が実らなかつたら、どうして人民があろう。もしも人民がなかつたら、どうして君があろう。ですから、本を捨て置いて末を問うことなどしましょうか」と。ここで進みださせたいえ、さらに尋ねた。「齊にいる処士で、鍾離子という者、元気になっていますか。あの人、その人柄といえば、食べ物のある者にも食べさせ、食べ物のない者にも食べさせる、着る物のある者にも衣服を与え、着る物のない者にも衣服を与えます。これは王を助けて王の民を養っていることになります。それなのに、どうして今日までなんの官職もいただかないのでしょうか。葉陽子は元気ですか。あの人、その人柄は、連れ合いを失った者に哀れみを掛け、みなしごや独り者の老人を恵み、貧乏にあえぐ者を救い、手もと不如意の者には補ってやります。これは、王を助けて王の民に安息を与えていることになります。それなのに、どうして今日までなんの官職も頂かないのでしょうか。北宮の娘の嬰児子は、元気になっていますか。佩の環も耳飾りも外してしまい、年寄るまで嫁に行かずに父母に孝養を尽くしています。これはまったく、民にお手本を示して孝の心を植えつけていることになります。それなのに、どうして今日まで朝廷にお呼び出しがないのでしょうか。あの二人の士を仕官させず、この一人の娘をお召しにならぬようでは、何によって齊国に王となり万民を慈しみなさるのですか。(『戦国策』齊策四)

五 錯綜

反復、対偶、排比、或いはその他の形が整った形式や、同様の言葉を並べる表現ながら、形式を不整合にしたり、異なった言葉遣いのように表現したりするもの、それを錯綜という。錯綜を構成するには概ね以下の四類の重要

な方法がある。

- 第一、同義語の利用 (字面の変更)
- 第二、語序の変更
- 第三、文の長短の変更
- 第四、文型の変更

第一、同義語の利用 これは言葉に些か手を加え、表現を前後で変えることである。反復での同義語の利用には以下のようなものがある。

(一)

御史大夫「歌は声のよいのを望まず、音調に合うのを貴びます。議論は綺麗なことばを望まず、実際に即するよう努力します。声ばかりよくても、曲の変化に従えないのでは、歌がうまいとは言えません。言葉ばかり綺麗でも情況にそぐわないようでは、議論がうまいとは言えません。あなたがたは**ぶんまわしをもっているのにさしがねの悪口を言い、みずもりを手にしているのにすみなわの悪口を言い、一つの穴に詳しく一つの木のもくめには明るいもの、全体のつりあいというものを知らないようなものです。自分で直接見ないと、人の言うことを信じないのは、ちょうど[夏の]蝉が[冬の]雪を知らないようなものです。むかしの文章ばかりをよりどころとして現代に対応しようとするのは、ちょうど商星と参星とがிரいまじるようなもの、ことじを膠づけして瑟をひくようなものです。融通がきかず、時勢に適合するのが困難です。孔子が世に用いられず、孟軻が諸侯に軽んぜられたのも、そうしたことによるものです」(『塩鉄論』相刺)**

(二)

物惜しみせず施すもの者は、必ずや豊かになり、潤す者は、必ずや潤される。(『旧約聖書』箴言十一之二十五)

(三)

そんな所への道は、とんでもなく奥地で人もいない。……**吾に食糧の蓄えがなく、私に食物がないのに、どうして行きつくことができようか。**(『莊子』山木)

排比で同義語の利用は以下のとおり

(四)

王后は北郊において蚕を養って、**天子の純服**を提供する。……夫人は北郊において蚕を養って**国君の冕服**を提供する。(『礼記』祭統 鄭注に「純服はまた冕服のこと、互いに意味を補いあう言い方にすぎない」)

(五)

仁はこれを行うにあたって**度数の違い**があり、義はこれを行うにあたって**長短・小大の違い**がある。(『礼記』表記 鄭注に「数と長短大小は、互いに意味を

補いあう言い方にすぎない」)

(六)

以上の三つの非難は、それを出してくるのはいずれも世間の海千山千でありながら老成して愚鈍に見える者たちである。広東の官吏にはこういった人がいて、幕僚にもこういった人がいて、遊説家にもこういった人がいて、商人にもこういった人がいる。おそらく士紳にもこういった人がいないとは限らない。誰かを見せしめとして世に警告すべきである。（龔自珍「送欽差大臣侯官林公序」）

(七)

地よ、善きと悪しきがわからないとはなにが地だ。天よ、賢さと愚かを間違えるとは天といえるか（閔漢卿「竇娥冤」雑劇第三折）。

傍線の部分は、そもそも同じ表現でよいのだが、ここでは錯綜をかけられているのである。

第二、語序の変更 これは言葉の順序を不揃いにして、表現を前後で変えることである。例えば、反復に用いられるときは以下の通り。

(八)

彼の上にはかがやく月ときらめく星とにかざられた深く限りない大空がかかっています。彼の下には、静かな透きとおった池のなかに、限りない大空がひろがっており、やはりかがやく月ときらめく星とにかざられていました。（魯迅訳「エロシェンコ童話集」春夜の夢）

(九)

その上方の空は、怪しくも高い。わたしは日ごろこのように怪しくも高い空を見たことがない。（魯迅「秋夜」）

(十)

王様はどうして利益などとおっしゃるのですか。（国を治めるには）仁義の道があるだけです。……王様も仁義の道を口にされればよろしいので、利益などを口にされる必要はありません。（『孟子』梁恵王上）

対偶に用いたもの。

(十一)

ひとひらの花びらが散ってさえ春は衰える、それがいま無数の花びらが風に翻ってまさに人を愁えさせる。（杜甫「曲江」）

(十二)

水のほとりの小さな丘が古城に沿ってあり、その上に数百の巨竹が生えている。一本の曲がりくねった道は歩きにくいが、十人ほど座れる平らな場所がある。ゆらゆらと風で枝が揺れるさまを皆で見、さらさらと筍の皮が落ちる音を時折聞く。古びた仏像は

色あせ線香もあげられておらず、瘦せた僧は干し肉のようで袈裟もぼろぼろだ。（陸游「城西接待院後竹下作」詩）

(十三)

やわらかな裳裾を六枚も引いたような湘江の水、高く結った髻のような巫山にかかるは一塊の雲。（李群玉「同鄭相並歌姬小飲戲贈」詩）

排比に用いたもの。

(十四)

小猿も大猿も、木から離れて水に入れば、魚や鼈にかなわない。険阻で危険な山道を通るとなると、一日千里を走る名馬も、狐狸にかなわない。（『戦国策』齊策三「名馬」の語が「険阻で危険な山道」の前にはない）

(十五)

疾き風が吹いて波立ち、木が茂って鳥が集まる。（『淮南子』主術訓「疾き風」「木が茂る」となっていて「風が疾し」「木が茂る」ではない）

(十六)

国君の富について問われたときには、土地の広さを数えて答え、……大夫の富について問われたときには、車の数でもって答える。庶人の富について問われたときには、飼っている家畜を数えて答える。（『礼記』曲礼下 中間の一句が、「車を数えて答える」ではない）

(十七)

その話では、人間という兄さんたちがいちばん偉く、そしていちばん賢い……「むろん、山の政治家の狐も、芸術家の猿のおばさんも、オウムの言語学者も、鳥の社会学者も天文学者のフクロウ博士も、えらいにはえらいが、人間の兄さんたちにはとてもかなわない。」という人もいる。（魯迅訳『エロシェンコ童話集』魚的悲哀）

(十八)

やつ（黄昏）は待っている、山の奥深くで、村の市場の地下貯蔵室で、林の生い茂る葉陰で、湖の暗い場所で。やつは待っている、古い洞窟の中で、空の穴の中で、誰かの家のすみっこで。やつは追われ姿を消したようだが、実はあらゆるかくれた場所に充滿しているのだ。やつは木の皮の裂け目に、人の衣服の襞にいる。最も小さな砂粒の下に隠れ、最も細い蜘蛛の巣の糸のうえに貼りつき、待っている。（『現代小説訳叢』影）

これらの表現の出場所も、同じような形式が可能なのだが、ここでは錯綜がかかけられているのである。

第三、文の長短の変更 これは長短の違う表現を交

えて、文に変化を持たせるやり方である。例えば以下は反復を例にするものである。

(十九)

宋代の読書人は、道学や理学を講じ、孔子を尊重して、千篇一律でした。幾人かの革新的な人々、たとえば王安石などが、新法を推し進めましたが、みな賛同が得られず、失敗いたしました。以後、みなはまた古い曲、社会とは無関係な古い曲を歌い、そのまま宋代の滅亡に至ったのでした。(魯迅「老調子已經唱完」)

(二十)

ヨセフは実を結ぶ若木、泉のほとりに実を結ぶ若木。枝は石垣を越えて伸びる。(『旧約』創世記四十九之二十二)

(二十一)

これこそわれらが故郷の燕、愛らしく生き生きとした燕、これまで幾人もの子供たちを歓呼させ、注目させ、夢中にさせ、幾人もの農民や市民が気をもみ、あるいはほっとしてそれを指さした、そして私たちの春に多くの春景や、多くの趣を添えてきた燕なのだ。(鄭振鐸『海燕』)

(二十二)

西門豹が、「河伯の妻を呼んで来い。顔の美醜を見よう」と言うと、女はすぐ帷の中から出されて前に来た。豹がこれをよく見てから、三老・巫祝・父老たちにむかい、「この女は顔がよくない。大巫の婆さんに頼むが、河には行って河伯に、『もっと美しい女をさがしたうえで、後日改めてお送りいたします』と報告してこい」と言うなり、部下の吏卒に命じ、みなで大巫の老婆を抱いて河の中に投げ込ませた。しばらくして、「巫の婆さんの帰りが遅いのは、いったいどうしたことだろう。弟子よ、催促に行ってみて来い」と言って、また河の中に一人の弟子を投げこんだ。しばらくして、「弟子の帰りが遅いのはいったいどうしたことだろう、もうひとり催促にやらせよう」と言って、また河の中に投げこんだ。都合三人の弟子を投げこむと、西門豹は、「巫の婆さんや弟子は女子であるから、うまく事情を言えないのだろう。三老に頼むが、河には行って、河伯に申しあげて来てくれ」と言って、また三老を河の中に投げこんだ。(『史記』滑稽列伝)

(二十三)

いま、ここに一人の人がいると仮定しよう。他人の果樹園に侵入して、その桃や李を盗んだとしよう。この話を多くの人が聞けば、だれでもその人の行為を非難するし、お役人が彼を逮捕すれば、必ず処罰するであろう。その理由はなぜか。他人に損害をかけてまで自分だけの得を原ろうとしたからである。他人の犬・豚・鶏・子豚をかっぱらってきたものに

至っては、その不義の程度は、他人の果樹園に侵入して桃や李を盗んだのより一段とはなはだしい。その理由はなぜか。他人に損害をかける程度がいよいよ多いからである。他人に損害をかける程度がいよいよ多ければ、その犯人の他人を思いやらぬ心情はますますひどく、その罪はますます重い。他人の家畜小屋に侵入して他人の馬や牛を取ってきた者に至っては、その不義の程度は、他人の犬・豚・鶏・子豚をかっぱらってきたのよりも一段とはなはだしい。その理由はなぜか。その他人に損害をかける程度がいよいよ多いからである。他人に損害をかける程度がいよいよ多ければ、その犯人の他人を思いやらぬ心情はますますひどく、その罪はますます重い。罪もない人を殺し、その着物や皮衣を奪い、戈や剣を取った者に至っては、その不義の程度は、他人の家畜小屋に侵入して他人の馬や牛を取ってきたのよりも一段とはなはだしい。その理由はなぜか。その他人に損害をかける程度がいよいよ多いからである。いやしくも他人に損害をかける程度がいよいよ多ければ、その犯人の他人を思いやらぬ心情はますますひどく、その罪はますます重い。このような犯罪ならば、天下の君子たちはみなこれを非難することを知っていて、正しく不義だと批判することができる。しかるに天下の君子たちは、ある強国が大いに不義の手段をめぐらして弱国を侵略するような事件が起こっても、非難することさえ知らない。それどころか強国のごきげんをとって侵略をほめたたえ、正義の戦いなどと批評する。これでは君子たちが義と不義との差別をわきまえていると言うわけにはいかない。(『墨子』非攻上)

排比を使った例

(二十四)

わたしが覚えているのは、そのひとつがとても小さな桃色の花をつけたことだ。いまもまだつけているが、さらに小さくなった。かの女は冷たい夜気のおかげで、身をすくめて夢みる。春の到来を夢み、秋の到来を夢みる。瘦せた詩人がかの女の最後の花びらを涙でぬぐい、たとえ秋が来ようと、冬が来ようと、そのあとに続いて来るのは春で、蝶がみだれ飛び、蜜蜂が春の歌をうたう、とかの女に告げるのを夢みる。(魯迅「秋夜」)

(二十五)

およそ物は平常の状態を得ないときには鳴る。草木のように声のないものでも、風がこれをたわませると鳴る。水のように声の無いものも風がこれをゆり動かせば鳴る。水が躍り上がるのは、これを行くてに物があってこれに打ち当たるためである。水が急にとび出すのは、これを梗ぐものがあるからである。

水が沸きたぎるのは、これを火にあぶり熱するものがあるからである。金や石の声のないものも、これを打つことあれば鳴るのである。（韓愈「送孟東野序」）

(二十六)

私は憎悪する、彼の瀟洒な邸宅を、彼の車夫を、彼の衛兵を、そして彼の馬までを。私は憎悪する、彼の金縁の眼鏡を、彼の鋭い眼を、彼の窪んだ頬を、彼の物腰を、彼の無為な生活を、そしてまた肥って身ぎれいな彼の子供たちを。私は憎悪する、彼の利己的な保護を、および私たちに對する彼の憎悪を。私は彼を憎悪する。（鄭振鐸訳『灰色馬』中巻）

以上のように、短い文の後ろに、長めの文を続けたり、長めの文の後ろに、急に短い文をおいたりするもの、これらはともに錯綜法なのである。

第四、文型の変化 これは各種の文型を用いるもので、たとえば、肯定の文型と否定の文型、直接表現文と質問文や感嘆文などを用いて錯綜を作り出す方法である。例えば

(二十七)

以上の五者は、だれも聞かない者はいないはずであるが、それを分かっているほうは勝ち、分かっているほうは勝てない。（『孫子兵法』計）

(二十八)

民が勇敢であれば戦に勝利を得、民が勇敢でないと戦は敗れるものだ。民を戦に一元化できるなら民は勇敢となり、民を一元化できないなら彼らは勇敢にはなるまい。（『商君書』画策）

(二十九)

孟子が梁の恵王にお目にかかった。王は池のそばに立って。大小の雁や鹿をながめながら、「昔の賢君もこういうことを楽しんだものだろうか」と尋ねた。孟子がお答える。「賢君であってはじめてこういうことを楽しむことができます。不賢者ではたといこのようなものがあっても、楽しむことはできません。（『孟子』梁恵王上）

などは肯定文と否定文を錯綜させたものである。

また、

(三十)

ばあやさんたちだって朝から晩まで一日中働かずくめですから、ちょっとくらい休ませてやらなくてはなりません。小女たちも一日おつとめしたんですもの、少しは遊ばせてやりませんか。（『紅樓夢』第二十回）

(三十一)

ほくだって羽のなかったときに生きていたし、あなただってウロコのなかったときに死ななかつたで

しょう。（魯迅訳『エロシエンコ童話集』春夜の夢）などは直接表現文と質問文を錯綜させたものである。

以上の四類の方法は、当然ながら必ずしも単独で使用されるとは限らない。前後であれこれ利用するので、錯綜のやり方自体に錯綜を加えることも当然ながらまた可能なのである。以下にあげるものなどは、第一、第二、第三、第四の四種の方法を利用した例に他ならない。

(三十二)

聖人は天下を統治することを責務とするものである。乱の発生する原因をあきらかにしなくてはならない。それならば、天下の乱はどういう原因によって起こるかを試みに考察してみると、それは人々が相互に愛しあわないことから起ってくる。たとえば、臣や子の地位にあるものが君や父の地位にあるものに愛情を尽くさないのは、いわゆる乱である。この場合、子は己自身を愛して父を愛さない。だから父を傷つけても、自分だけは利益を得ようとする。弟は、己自身だけを愛して兄を愛さない。だから兄を傷つけても、自分だけは利益を得ようとする。臣は、己自身だけを愛して君を愛さない。だから君を傷つけても、自分だけは利益を得ようとする。このような例はいわゆる乱である。父が子を慈愛せず、兄が弟を慈愛せず、君が臣を慈愛せずという場合だって、これまた天下の、いわゆる乱である。父は己自身だけを愛して子を愛さない。だから、子を傷つけても自分だけは利益を得ようとする。兄は己自身だけを愛して弟を愛さない。だから、弟を傷つけても自分だけは利益を得ようとする。君は己自身だけを愛して臣を愛さない。だから、臣を傷つけても自分だけは利益を得ようとする。それは何故か。みな人が相互に愛しあわないことから起こるのである。天下じゅうの盗みや傷害をなす者だって、またそうだ。盗人は自分の家だけを愛して、他の家を愛さない。だから、他家で窃盗を働いてまで、自分の家だけは利益を得ようとする。傷害をなす者は自分のからだだけを愛して、他人のからだを愛さない。だから、他人のからだを傷害してまで、自分のからだだけは利益を得ようとする。これは何故か。みな人々が相互に愛しあわないことから起こるのである。大夫どうしが他の家を乱しあい、諸侯どうしが他の国を攻めあう例だって、またそうだ。大夫はそれぞれ自分の家だけを愛して、他の大夫の家を愛さない。だから、他家を乱してまで、自分の家だけは利益を得ようとする。諸侯はそれぞれ自分の国だけを愛して、他の諸侯の国を愛さない。だから、異国を攻めてまで、自分の国だけは利益を得ようとする。天下を乱す条件は以上の事例に備わっているが、これらはどういふ原因によって起こるかを考察すると、それはみな人々が相互に愛しあわないことから起こって

る。(『墨子』兼愛上)

文中の「それは何故か」と「これは何故か」の変化が字面の変更である。「子は己自身を愛して……」と「父は己自身だけを愛して……」の変化が文の長短の変更である。「これは何故か。みな人々が相互に愛しあわないことから起こるのである」と「これらはどういう原因によって起こるかを考察すると、それはみな人々が相互に愛しあわないことから起こってくる」の変化は質問を用いた文と直接表現を用いた文の違いである。この他にもこれらの錯綜の方法を用いた箇所がまだあるが、読者が詳細に読めば分かるはずだ。さらに以下に並べるのは第一、第二、第三、第四の四種類を用いたものである。

(三十三)

鄒忌は身の丈八尺あまり、体つきみやびて麗しかった。朝服をつけ冠を頂いて鏡をのぞき、その妻に、「私と比べて城北の徐公はいずれが美男子か」と言えば、妻は、「あなたの美男子ぶりは大変なもの、徐公がなんであなたに及びましょうか」と言った。城北の徐公とは、齊国に聞こえた見目麗しいおのこなのである。しかし、鄒忌はどうも信じられなくて、今度はその妾に尋ねた。「私と比べて徐公はいずれが美男子か」。妾は、「徐公よりあなたの方が美しい」と言う。その翌日外部からの来客があって、対談するうちに、この質問を客に向けた。「私と徐公を比べるといずれが美男子か」客は、「徐公はあなたの美男ぶりには及びませんね」と言った。その翌日に徐公がやって来た。つくづく観察するにつけ、とてもかなわぬと思えてくる。そっと鏡をのぞいて自分の顔をながめて見ると、それはもう、とても遠く及ばない。日暮れて寢床に入って考えてみた。「妻が私のほうが男前だと言ったのは、私へのえこひいきからなのだ。妾が私のほうが男前だと言ったのは、私への恐れからなのだ。客が私のほうが男前だと言ったのは、私に取り入ろうとしたことなのだ」と。そこで、参内して威王にまみえ、「臣はほんとうに、徐公の男前には及ばないことを知っております。それなのに、臣の妻は臣にひいきし、臣の妾は臣を恐れ、臣の客は臣に取り入ろうといたしまして、みな徐公よりも美男であると申しました。今、齊の地は千里四方、百二十城でございますが、後宮の侍女たちも側近の方々も王にひいきせぬものはなく、朝廷の臣は王を恐れぬ者はなく、広い国内に王に取り入ろうとする気持ちのない者はありません。こう考えてみますと、王が目隠しされておられるのは、大変なものです」と申し上げた。王は「なるほど」と考え込んだうえ、政令を下した。「私の過ちを面と向かって指摘できた者には上等のほうびを取らせよう。上書して私をいさめることのできた者には、中

等のほうびを取らせよう。町中で非難して私の耳に入れることのできた者には、下等のほうびを取らせよう」と。この政令が下ってしばらくのうちは、諫言を奉る群臣たちで、宮殿の門も中庭も市場のような雑踏ぶりであったが、数月のうちには、折々にぼつぼつと進諫があり、一年ののちには、何か申し上げたいと思っても進諫の種にできることが尽きてしまった。燕・趙・韓・魏は、このことを聞くと、みな齊に来朝した。これがいわゆる、朝廷の内に座しながら戦いに勝つ、ということなのだ。(『戦国策』齊策一)

文中の「私と比べて城北の徐公はいずれが美男子か」と「私と比べて徐公はいずれが美男子か」の変化は字面を変え、文の長さを変えたもの、「私と比べて徐公はいずれが美男子か」と「私と徐公を比べるといずれが美男子か」の変化は語順を変えたもの、「徐公がなんであなたに及びましょうか」と「徐公よりあなたの方が美しい」は句型を変えたもの、このほかにもこのような錯綜を用いた場所があるが、これも細かくみれば分かるだろう。

文中にこのような錯綜を用いるのは、話し方が単調で平板になるのを避けるのが概ねの目的である。語る時にはそもそも反復などの類似表現が必要となるのだが、類似の場所があまりに多くなると、却ってうんざりさせてしまう。この時によい処方となるのが、すなわち錯綜の修辞法である。錯綜の表現法を用いることで、同じようでも違いが生まれ、単調で平板などの欠点も自ずと消えてしまう。この修辞法の大切さは、少なくとも対偶に劣るものではないと考える。

付記

この修辞法で第一類の錯綜は、以前は「互文」とか「互辞」と呼んでいた。例えば劉知幾が『史通』を著した時、「雑説」の下篇に隋人の姚士会(最)の『梁後略』に、高祖が「手に入れたのは我で、失ったのも予である」と語るのを引き、「我を予と変えて言うのは、互文によって文を作っているのだが、語りの部分でこのような表現を使おうとするのは、道理としては不自然だ」と述べる。このような表現法になったのは、当時「対の表現が盛んに行われ、対語表現がもとめられた」ことによる。また、明の顧炎武の『日知録』卷二十四互辞の所、「『易』[蠱]に「父の蠱に幹たり、子あれば考咎なし」は、「父」を「考」と言い替えている。『尚書』仲虺之誥に「予来世を恐る、^{われ}台を以て口実とせんか」は、「予」をまた「台」と言っている、……皆互辞である」とある。

第二類の錯綜となると、呼び名及び議論は更に多くなるが、その議論はほとんどが錯綜の修辞法を弁護して出てきたものだ。例えば宋の沈括(存中)の「相い錯して文を成す」というものは以下のようなものである。

韓愈の文集の中の「羅池神碑銘」に、「春は与に猿が吟じ、秋は与に鶴が飛ぶ」の文があるが、いま石刻で確かめてみると、「春は与に猿が吟じ、秋は鶴が与に飛ぶ」となっている。昔の人はこの方法をよく用いている。例えば『楚辞』に「吉日、辰良し」、「蕙肴を蒸め蘭を藉き、奠くは桂酒、椒漿」（ともに「九歌」に見える）は、相錯（斜交いに対応）して文を成すもので、そうすると、言葉の勢いが、生き生きとしてくるのである。（『夢溪筆談』巻十四）

宋の陳善のいわゆる「その語を錯綜する」というものは、以下のようなものである。

『楚辞』では吉日を辰良と対比させ、蕙肴蒸を奠桂酒と対比させている。宋の沈存中は、これは古人がその語を錯綜させると力強くなると考えたからにすぎないと言う。私はこのやり方が『春秋』に基づくものであると考えている。『春秋』[僖公十六年]に「隕石が宋に五個落ちてきた。この月、六羽の水鳥（鷓）が宋の都を後ろ向きに飛んで行った」と書かれているが、これはいずれも語る者が、石、鷓、五、六の前後に意味を持たせたもので、聖人の表現法を知らぬというのはまさにこのことである。もし「隕石が宋に五個落ちた」と言ったうえに、さらに「逆さに飛ぶ水鳥が宋に六羽いた」というと文章に精彩を欠く。それゆえやむを得ずその言葉を錯綜させ、それで活力を出したのである。『楚辞』はまさにこの方法を用いたのだ。後に韓退之が「羅池碑」を作り「春は与に猿と吟じ、秋は鶴が与に飛ぶ」としたが、これは「与」の文字の位置を変えて詠んだもので、おそらくこれも語の順番を換えて言葉を力強くさせようとしたためであろう。現在「羅池碑」石刻の古本はこうなっている。ところが歐陽公は、自らが入手した李生の『昌黎集』と比べてみたところ、「秋は鶴と与に飛ぶ」と作っているばかりなので、この碑が間違っていて彫られたと疑った。ただ沈存中が初めて古人の意図を理解したのであるが、この方法が『春秋』から来ているとは知らなかったのである。（『捫虱新語』巻五）

宋の嚴有翼のいう「対を蹉わせる」とは以下の通り。僧惠洪の『冷齋夜話』には、介甫の詩に「春の残りに葉は密に枝の花は少、眠りから覚めて茶を飲むこと多く盃を傾けること疏」というものがあるが、この「多」は「親」と作るべきで、世の人の転記の誤りである、とある。僧惠洪の意図はおそらく「少」と「密」を対比させ、「疏」と「親」を対比させようとしたのであろう。私が荆南（湖北省中部）の教官をしていたとき、江朝宗と同僚となって、たまたまこのことに話が及んだ。江朝宗は「惠洪は馬鹿なことを言う、まったく古人の詩格が分かっていない。

この連は「密」と「疏」を、「多」と「少」をちょうど斜交いに対応するよう用いているのだ。所謂対を蹉わせる方法である」と言った。（『芸苑雌黄』、『蒼溪漁隱叢話』後集二十五に引く）

このほかに元の陳繹曾『文説』に所謂「拗語」の類いなどは、内容も大同小異で、錯綜の面を強調するが、例証が対偶に偏っているに過ぎないので、これ以上の引用は不要であろう。第三、第四の錯綜については、中国の典籍の中でそれを語ったものはまだ見たことがない。

六 頂真

頂真とは、前の一文の終わりを次の一文の初めに用いることで、隣接する文の頭尾がつながり、上に挙げたものを下で受け取り続ける面白さをもつ表現法である。歌曲にしばしば見える。例えば「翟義の門人の作」の「平陵東」がそうだ。

平陵東、松柏桐、

平陵の東 松や柏や桐のあるところ

不知何人劫義公。

いったい誰が義公を襲ったのか

劫義公、在高堂下、

義公を襲うは 高堂の下

交錢百万兩走馬。

錢百万と駿馬二頭を出せばゆるすという

兩走馬、亦誠難、

駿馬二頭もとは 誠に難しい

顧見追吏心中惻。

追い立てる役人を見れば胸はいたむ

心中惻、血出漉、

胸はいたみ 血の滲む思い

婦告我家売黄犢。

我家に帰り黄色の犢を売れと告げよ

（『宋書』樂志三に見える。『樂府古題要解』に「これは漢の翟義の門人が作ったもの。翟義は丞相の方進の末子で、字は文中、東郡の太守である。王莽が漢を篡奪したので、兵を挙げて誅しようとしたが、負けて殺されてしまい、門人が歌を作って悲しんだのである」とある。）

また劉十六が山に帰るときに李白が送った「白雲歌」に以下のようにある。

楚山秦山皆白雲。

楚山 秦山 共にみえる白雲

白雲處處長隨君。

白雲は至るところ長く君に随う

長随君。

長く君に随う

君入楚山裏。

君が楚山の裏に入れば

雲亦随君渡湘水。

雲も君に随って渡る湘水

湘水上 女羅衣。

湘水の上には 女羅の衣のひとあり

白雲堪卧君早帰。

白雲は十分寝床になろう君よ早く帰りたいまえ

二つともこの修辭法である。その他のジャンルにもある。例えば、

人々が農業にいそめば、田畑が開墾される。田畑が開墾されると、穀物の収穫が増える、穀物の収穫が増えると、国が豊かになる、国が豊かになると、兵士が強くなる、兵士が強くなると戦に勝つ、戦に勝つと、領地が広がるのだ。(『管子』 治国) すべて形ある物は、裁断しやすく、分割しやすい。どうしてそう言えるか、形があれば長い短いがある。長い短いがあると大きい小さいがある。大きい小さいがあると四角い円いがある。四角い円いがあると硬い脆いがある、硬い脆いがあると軽い重いがある。軽い重いがあると黒い白いがある。(『韓非子』解老)

この修辭法には概ね二種の型式がある。

(1) それぞれの句で上下に同一の語を以て繋ぐ蝉聯体を用いるもの。上述の数例がそうで、これを聯珠格と呼ぶ人がいる。

(2) 単に章と章の間だけに同一の語を使って繋ぐ蝉聯体を用いるもの。これを連環体と呼ぶ人がいる。

二つの型式はともに『詩經』の中にすでに萌芽がみられる(大雅の「既醉」篇などは二種の萌芽をともに備えた一篇である。例えば、「既醉」の二章の終わりでは、「介爾昭明」とのべ、三章の初めでは「昭明有融」と述べる、また三章の終わりでは「公尸嘉告」と述べ、四章の初めでは「其告維何」と述べ、四章の終わりでは「撰以威儀」と述べ、五章の始めでは「威儀孔時」と述べる。このように前の語を使って次に繋ぐ所謂蝉聯体が、八章まで続くが、ともに所謂連環体を用いたものである。その中には更に二箇所所謂聯珠型式を用いたところがある。例えば三章の二句では「高朗令終」と述べ、三句では「令終有俶」と述べ、さらに五章の二句では「君子有孝子」と

述べ、三句では「孝子不置」と述べているが、これらは所謂聯珠型式である³⁾。しかし、後世ほどきちんと整えられたものではない。今いくつか有名な例を以下にあげよう。

他、他、他、傷心辞漢主、

彼女 彼女 彼女は 辛い心うちで漢の皇帝から別れ

我、我、我、携手上河梁。

私 私 私は 手を携えて橋を渡る

他部従、入窮荒。

彼女は付き従うものと 最果ての荒野に入り

我鑿輿、返咸陽。

私は天子の御輿に乗りもどるは都の咸陽

返咸陽、過宮牆。

咸陽にもどり 通り過ぎる宮城の牆壁

過宮牆、繞回廊。

宮城の牆壁を通り過ぎ 巡る回廊

繞回廊、近椒房。

回廊を巡り 近づくは皇后の住む椒房殿

近椒房、月昏黃。

椒房殿に近づく と 月は暗い黄色

月昏黃、夜生涼。

月は暗い黄色 夜は次第に冷涼に

夜生涼、泣寒蠶。

夜は次第に冷涼 泣くは寒蟬

泣寒蠶、緑紗窗。

寒蟬が泣く 君のいた緑のカーテンの窓

緑紗窗、不思量。

緑のカーテンの窓 もう思うまい

呀! 不思量、除是鉄心腸。

ああもう思うまい 鋼鉄になす胸の内

鉄心腸、也愁泪滴千行。

胸の内を鋼鉄にしても止めどなく流れ出る涙

(馬致远「漢宮秋」雜劇第三折)

桃花冷落被風飄、

桃の花は衰えて風に吹き散らされ

飄落残花過小橋。

吹き散らされた花びらが舞う小さな橋

橋下金魚双戯水、

橋の下には金魚が対をなして戯れる水

水辺小鳥理新毛。

水辺の小鳥が整える新しい羽

毛衣未湿黃梅雨、

³ 大雅「既醉」篇の原文は以下の通り。

①既醉以酒 既飽以德 君子萬年 介爾景福。②既醉以酒 爾既將 君子萬年 介爾昭明。
③昭明有融 高朗令終 令終有俶 公尸嘉告。④其告維持 籩豆靜嘉 朋友攸攝 攝以威儀。
⑤威儀孔時 君子有孝子 孝子不置 永錫爾類。⑥其類維何 室家之壺 君子萬年 永錫祚胤。
⑦其胤維何 天被爾祿 君子萬年 景命有僕。 ⑧其僕維何 釐爾女士 釐爾女士 從以孫子。

羽の衣を濡らすほどもない黄梅の雨
 雨滴紅梨分外嬌。
 雨のしずくが赤い梨の実につき思いがけない嬌やかさ
 嬌姿常伴垂楊柳、
 嬌なすがたが寄り添うは垂れた枝の楊柳
 柳外双飛紫燕高。
 柳の周りを一對の燕が飛ぶこと高し
 高閣佳人吹玉笛、
 高い楼閣に佳人が吹くのは玉笛
 笛辺鸞線掛絲絛。
 笛のそばでは琴に掛けられる糸
 絛結玲瓏香仏手、
 糸を結ぶのは玲瓏たるふくよかな手
 手中有扇望河潮。
 手に扇を持ち眺めるは河辺に寄せる潮
 潮平兩岸風帆穩、
 潮は平坦に兩岸に行く船の帆は穩やか
 穩坐舟中且慢揺。
 穩やかに船に座していると船はゆったりと揺れる。
 揺入西河天將晚、
 揺られながら西河に入れば日はまさに晩れ
 晩窗寂寞嘆無聊。
 晩れゆく窓辺に寂寞として嘆くは無聊
 聊推紗窗觀冷落、
 聊か紗窗を推して観るは風景の冷落さ
 落雲渺渺被水敲。
 落ちくる雲は渺渺として舟を河水が敲く
 敲門借問天台路。
 敲く門 問うは天台への路
 路過西河有斷橋、
 路は西河を過ぎたところにみえる斷橋。
 橋邊種碧桃。
 橋のあたりに植えられているのは碧桃。
 (『白雪遺音選』「桃花冷落」)

以上が第一型である。この型は第二型に比べて数が多くまた一層きちんと整えられている。歌謡のなかにはしばしば一首すべてが蝉聯体になっていて、最後の一句でまた元に戻って冒頭の一句につながり、循環して終わらない形になっているものもある。例えば上の「桃花冷落」がその例である。

第二型。

謁帝承明廬、逝將歸旧疆。
 承明廬で、皇帝に別れのお目通りをし
 もとの領地へ帰って行くことになった
 清晨發皇邑、日夕過首陽。

朝まだきに帝都を立ち出でて
 日の暮れ近くになって首陽山のあたりを通った
 伊洛広且深、欲濟川無梁。
 伊水と洛水はともに広くもまた深く
 渡ろうとしても依るべき橋がない
 泛舟越洪濤、怨彼東路長。
 舟を浮かべて大きな波をしのいでいくと
 いよいよ東への路が遠く思われ情けなくなる
 顧瞻恋城闕、引領情内傷。
 幾度か皇城をみかえってはなつかしみ
 首を伸ばして眺めやりつつ心の中で悲しみつづけた
 太谷何寥廓、山樹鬱蒼蒼。
 太谷を通ればそこはなんと深く広いことだろう
 谷をかこむ山の木々は、青々とこんもり茂っていた
 霖雨泥我塗、流潦浩縱橫。
 長雨の後とて行く手の路はどろどろになり
 地上を流れる雨水は一面にひろがりむやみに走っている
 中遠絶無軌、改轍登高岡。
 道は途中で断ち切れ車を進ませるところもない
 車の道すじをかえ高い丘に登っていく
 修坂造雲日、我馬玄以黃。
 長い坂道は雲や日のかかる遙かな空まで続き
 馬も疲れ果てて毛並みは黒から黄になってしまった
 玄黃猶能進、我思鬱以紆。
 黒から黄になってしまった馬はそれでもなお進みはするが
 私の心はうっとおしく結ばれとどこおったまま
 鬱紆將何念、親愛在離居。
 うっとおしく結ばれたままひとえに思い続けるのは
 親しい兄弟がはなればなれになっていること
 本図相與偕、中更不克俱。
 もともと連れ立って一緒に旅をしようと考えていたのに
 途中で予定が変えられて同行を許されぬこととなった
 鴟梟鳴衡軛、豺狼当路衢。
 フクロウが軛の上でなき
 山犬どもが道を塞ぐ
 蒼蠅問白黒、讒巧令親疎。
 青蠅が白黒を乱し
 そしる者どもが親しい間をうとましめたのだ
 欲還絶無蹊、攬轡止踟躕。
 都に帰るにもたどる小道すらなく

ただ手綱を手にしたまま立ち止まりつつ行き悩む

踟躕亦何留、相思無終極。

行き悩んでも留まる所はない
君への思いも果てしがない

秋風発微涼、寒蟬鳴我側。

秋風は肌寒さを感じさせだし
ヒグラシはすぐそこで鳴いている

原野何蕭条、白日忽西匿。

野原はなんという寂しさであろう
輝いていた日も速くも西に隠れ落ちた

帰鳥赴喬林、翩翩厲羽翼。

ねぐらに帰る鳥は
ひらひらと急ぎ羽ばたいて飛び去る

狐獸走索群、銜草不遑食。

群れからはなれた野獣も つれを求めて走り
草を口にしつつ喉を下す暇もない

感物傷我懷、撫心長太息。

この鳥や獣を見てはいよいよ人恋しく
胸をなでて深いため息をつく

太息將何為、天命與我違。

深いため息をついても今はなにもできそうもない
はや神の定めは私の上に不利に働いただけなのだ
奈何念同生、一往形不帰。

兄の任城王を慕ってもすべてせんないこと
ひとたび死んだ上は体の帰ることなどないのだ

孤魂翔故域、靈柩寄京師。

ひとりぼっちの魂はもとの住まいに天がけていっ
たであろう

棺はなお京都に留められてはいるが

存者忽復過、亡没身自衰。

命ある者はすべて思いのほかはやくも過ぎ去るもの
ひとたび亡くなれば身もそれだけでくずれてしま
う

人生処一世、去若朝露晞。

人が生まれてこの世にいても
みまかることは朝の露が日の出と共に乾いてしま
うようなもの

年在桑榆間、影響不能追。

よわいはすぐにたけて日の沈むまでのこと
影や響きをとらえ追うことができないのと似る

自顧非金石、咄嗟令心悲。

我が身も朽ちない金石のたぐいではない
嘆かれて心を傷ましめずにはおれない

心悲動我神、棄置莫復陳。

心が傷むと魂まで揺れ動くが

それはそれとしてうちすて今はもう何も言うまい
丈夫志四海、万里猶比鄰。

男子が世界への雄飛を志した上は
万里のかなたの地も隣近所のように思うべきなの
だろう

恩愛苟不虧、在遠分日親。

恩愛がかりそめにも欠けない以上
遠く離れていたとしても心意気は日々親しさが
増すはず

何必同衾幃、然後展慰懃。

夜着やとばりを共にして
そこで始めて情の厚さをかさねあうというもので
もあるまい

憂思成疾疢、無乃兕女仁。

別離を憂えて病になってしまうなど
それこそ女どもの情け心に過ぎないだろう
倉卒骨肉情、能不懷苦辛。

にわか別れに兄弟の情として
胸の苦しさを感ぜないでいられようか

苦辛何慮思、天命信可疑。

胸を苦しめ何を思い巡らそうとするのか
天の与える寿命など今は心から信じることができ
ない

虚無求列仙、松子久吾欺。

仙人の一人になることを願うなどついに絵空ごと
石松子や王子喬も私たちが長くたぶらかして
いたのだ

變故在斯須、百年誰能持。

人の死こそはつかの間に来るものだ
百年の命さえ誰が生きることができようか

離別永無会、執手將何時。

別ればふたたびあって語る事も先長くできそう
にない 手をとり合って逢えるのはいったいつ
の日だろう

王其愛玉体、俱享黄発期。

王よまず御体を大切に
共に髪の色になるよわいまで生きながらえよう
収泪即長路、援筆従此辞。

涙をぬぐって行き先長い旅路に出で立とうとし
この詩を綴り終わってはいよいよ今お別れすること
にしよう

(曹植「贈白馬王彪」詩)

さらに

一
覆舟山下龍光寺、 覆舟山下の龍光寺
玄武湖畔五龍堂。 玄武湖畔には五龍堂

想見旧時遊歴処、 見てみたいと思うのは昔
巡った場所
煙雲渺渺水茫茫。 煙雲は浮かび湖水は茫々
たるありさまであった

二

煙雲渺渺水茫茫、 煙雲は浮かび湖水は茫々たる
ありさまで
繚繞蕪城一帶長。 広陵城のまわりを長々と取り
巻いていよう
高目黄塵憂世事、 黄塵の地を望み見て世事を愁
う
追思塵跡故難忘。 旧跡を思い出すのは忘れ難い
ため

三

追思塵跡故難忘、 旧跡を思い出すのは忘れ難い
ため
翠木蒼藤水一方。 水辺のほとりの青々と茂る木
や鬱蒼たる藤の木
聞説精廬今更好、 聞くところでは寺の建物は今
ではさらに好くなったとのこ
と
好随残汴理帰艫。 運河となった汴水にそって戻
ろうと帰りの船を準備する
(王安石「憶金陵三首」)

以上が第二型である。

七 倒装

発話の中で意図的に文法上通常の語順を転倒させたものを倒裝修辞法という。例えば、通常の語順では「先生のお言葉はなんとも大変厳しいものだ!」（『史記』魯仲連列伝）と言うところを「なんとも大変厳しいものだ、先生のお言葉は!」と言うのが倒装の実例である。概ねがこの方法で語調を強めたり、音節を整えたり、或いは語法を錯綜させるものである。その形式は二類に大きく分けられる。

第一類 言葉の倒装

(一)

「雷峰夕照」の実際の情景はわたしも見たことがあるが、思ったのは、ちっとも美しい景色ではないということだ。（魯迅「論雷峰塔的倒掉」通常の語順であれば、ちっとも美しい景色ではないと思った。）

(二)

伯魚の母が死んだが、喪が過ぎてもまだ泣き続けている。先生は尋ねた「誰だね、まだ泣いているのは」、門人は答えた「鯉です」。（『礼記』檀弓上 通常の順序は、泣いているのは誰だね。）

(三)

畠を耕すときは良い鋤を使うべし

歌を唱うときは良い歌い手を探すべし
今や皆歌い手となった 人々は
歌って長江の水を逆流させよ（安徽民歌「歌って長江の水を逆流させよ」通常の順序は、今や人々は歌い手となった。）

(四)

そのうえ虞国は桓・莊の一族よりも親しくはありません、晋は虞国を大切にするのでしょうか。いったい彼らに何の罪があるかといって、皆殺しなどにしたのでしょう。たかだか勢力がちょっと強いというだけで、親類が人気よくて羽振りをかきかすということだけで、それをやっつけてしまうのですから、まして他国を見逃すものですか。（『左伝』僖公五年 通常の順序なら以下の通り。晋は虞国を大切にするのでしょうか、そのうえ虞国は桓・莊の一族よりも親しくはありません。）

(五)

私は梁と燕に趙を助けさせよう、齊と楚はもとより助けるだろうから（『戦国策』趙策 普通の語順であれば、齊と楚はもとより助けるだろうから、私は梁と燕に趙を助けさせよう。）

(六)

桓公が外に宿を取ったが鼎を並べた食事はしなかった。中婦諸子が宮女に言った「どうしていっしょに外出しないのか、君主が行こうとしているのに」（『管子』戒 通常の語順であれば、君主が行こうとしているのに、どうしていっしょに外出しないのか。）

(七)

闕えば天を 象緯逼まり 臥せば雲に 衣装冷ややか（杜甫「游龍門奉先寺」通常は天を闕えば 雲に臥せば。）

(八)

古木に鳴く寒鳥 空山に啼く夜猿（魏徵「述懐」通常の語順は、寒鳥鳴き 夜猿啼く。）

この分類の倒装は概ね語順や語調上の顛倒で、思考の筋道や文法の組み立てに関わるものではない。

第二類 表現が変わる倒装

(九)

ことわざにも、腹を立てたのは家なのにプリプリしているのは市場、と申すものは楚のことを言ったものです。（『左伝』昭公十九年 通常の語順では、家で腹を立てたのに、市場でもプリプリしている。）

(十)

家の年寄りの一人二人は本家の主人のことにつき心配をしまして、謀らうこと一族においておこない、年上で血の近いものを長に立てました。（『左伝』昭公十九年 通常の語順では、一族において謀らうことにし。）

- (十一)
古代は政教が異なる、法るは之れいづれの古代か、帝王が同じ事を引き継いでいないのなら、我々が従うのは之れ誰の礼政か。(『商君書』更法)
- (十二)
季子然が問うた、「仲由と冉求は、大臣と謂うべきか。」先生は言う、「私はあなたが問うのは別のことだだと思っていたが、子路と子由をお訊ねか。」(『論語』先進)
- (十三)
軍隊を率いてでてきたのは、ただ求めてのことだ、是れ敵を。(『左伝』宣公十二年)
- (十四)
野鶴の如き双鬢はそのままに、隣で鶏が四更を告げて啼くのもかまいなし(杜甫「書堂既夜月下賦絶句」通常の語順では、双鬢は野鶴の如し。)
- (十五)
紅豆に啄むこと余りあり鸚鵡の粒 碧梧は棲むこと老し鳳凰の枝(杜甫「秋興」通常の語順では、鸚鵡は啄み余す紅豆の粒、鳳凰は棲むこと老し碧梧の枝。)
- (十六)
薊丘に植えたるは、汶篁の植物。(『史記』樂毅列伝通常であれば、「汶篁の植物を、薊丘に植える」*)。『古書疑義挙例』倒句例に詳しい。

以上の各例では、述語と目的語を顛倒させたり(九、十)、或いは主語と述語の中の一部で位置を交換したり(十五のように)、場所と目的語の位置を変えたり(十六のように)、別に一字を入れ込んだり(十一、十二の「之」、十三の「是」のように)、論理上の順序を変えたり(十四のように)している。順序を顛倒させているのは同様だが、思考経路や文法構成にまでそれが及び、語順を単に倒装した第一類とは異なっている。

新文芸の中においては、第二類はほとんど使われていない、特殊な描写を除いては。第一類の用法は、詩文(文芸作品)はもちろんのこと、以前よりも一層多く用いられるようになった。

附記：王若虚『津南遺老集』卷三十六に所謂「旋造」もまた、倒装の一つと見なされる。

旋造の実例として、以下にいくつかあげる。

孤臣涙を危うくし、孽子心を墜とす(江淹「恨賦」実は、涕を墜とし、心を危うくする。)

心が折れ骨が驚く(江淹「恨賦」実は、心が驚き骨が折れる。)

泉は甘く而して酒は^{つめた}冽い(欧陽脩「醉翁亭記」実は、泉は冽く、酒は甘い。)

八 跳脱

言葉には特殊な心境、例えば心情の急転、事柄の突出などにより、話の途中で終わってしまうものがある。これを跳脱(言いさし)と呼ぶ。跳脱は形式上不完全であるか途中で切れて次に続かないものばかりで、これは言語表現の上では本来は特殊形態である。しかし、もし情況にうまく合わせて使えるのであれば、不完全ながらも完全なもの以上の情感を伝え、不連続ながら連続したものより効果を上げる力を持つ。

跳脱は概ね三類に分けることができる。第一は途中まで述べて終わらせたり別の話に飛ぶもので、これは急取と呼べよう。多くは、「最後まで言おうとせずに、さっさと止めてしまい、言外の意を悟らせるもの」である。たとえば、『呐喊』の中の「狂人日記」の結びの言葉、「人を食ったことがない子供は、まだいるだろうか、子供を救い——」、などがその例である。

年末の休みが近づきました。どうか帰ってきて下さい。筆談は面談に比べて時には却って真実を伝えるときもあり、最後まで語る事があるものですが、しかし冬の夜に暖炉をともに囲むこと、これも人生の中で楽しいことではないでしょうか。とはいえ、風雪しげき長い道のりは辛いことではしょうが。まだ幼い弟もあなたの帰郷を待ち望んでいます。先週私が家に帰ったとき、弟は私に言って——あの子は私のようになるはずはありませんが、またあなたにもあまり似ていません。あの子はもっと活発でのびのびしています。わたしは時々思います。あの子はまだ小さくて、十歳です、当然天真爛漫な子供なのです。たとえどうであって私のように決してならないでしょう。どうか神様、お願いします。あの子がずっとこれからもあなたに似ていますように、これが私の祈りです。(『冰心選集』「煩悶」「私に言って」以下は別の話に飛んでいる。)

魯智深は禅杖をひっさげてふたたび庫裏へ引き返した。老僧たちは粥を食べようと、ちょどいま——智深がそこにふんぷん怒ってやってきて、老僧たちは指を突きつけられとがめらるはめになった。「おまえたちこそ寺をめっちゃめっちゃにした張本人のくせに、ぬけぬけとおれをだましたな」。すると老僧たちは口をそろえて、「あいつのいうことを、真に受

*4 この部分、原文は「薊丘之植、植於汶篁(薊丘に之れ植うるは、汶篁に植えたるものなり)」、本来はこれが「汶篁之植、植於薊丘(汶篁の植、薊丘に植うる)」と書かれるべきだといいたいところ。

けてはなりません。……だいいち考えてもごらん下さい。あいつらは酒を食らい肉を食べているというのに、わたしらは粥にもありつけないしまつ。さっきだって、あなたに食べてしまわれなかつたらはらしていただくくらいで。「なるほどな」と智深は、禅杖を逆手に持ちかえ、また方丈の方へとってかえしたが、みればくぐり門ははやとござされている。（『水滸伝』第六回「ちょうどいま」以下も別の話に飛んでいる。）

平児や豊児が先に立って手早く侍女らに代わって鍵を掛けるものは掛け、しまうものはしまつてやった。探春はいった。「あたしの物はあなたがたに捜さがさせてあげました。でもあたしの女中のを捜したいとおっしゃっても、それはおことわりします。あたしは皆さんと違って意地の悪い人間なんです。女中の持っているものは、全部あたしは知っています。全部あたしのこの部屋にしまつているんですから。針一本、糸一筋、女中達に勝手なまねはさせません。ですから、お捜しになりたければ、あたしの処をお捜しになってください。それでみなさんご不満ならば、ご遠慮はいりません、どうぞ奥方さまの処に行つて、あたしが奥方さまの仰せに背いたと申し上げてくださいまし。どんなご処分でも、あたし喜んで受けますわ。——みなさんもそんなにあわてることはないのです。いづれみなさんもお調べを受けるときがくるでしょうから。みなさん今朝も、甄家のことをいろいろとうわさしていらしたじゃありませんか。ご自分の家中をわけもないのに捜索したりなすつたものだから、とうとう本当におかみの捜索をお受けになつたつて。あたしどもの処にもそろそろ番がまわつてきたんですのね。なんといつてもこういう大家は、外部から殺しにきても、なかなか簡単には殺せないものです。これは古人の言葉にもありますわ。『百足の虫は死すとも倒れず』とね。どうしてもまず家の内部から自殺自滅するようなことをやつて、はじめて一敗地に塗れるのです」。

（『紅樓夢』第七十四回「あたし喜んで受けますわ」以下も別の話に飛んでいる。）

呉先生は体を縛つていた無形の縄からほとんど解放されたので、ずいぶんと楽になつた気がした。感銘の心が恐怖に変わり、興奮はたとえようのないくらいだった。彼はどうやつて子供を借りてくれればよいか分からなかつたが、それを問おうと思わなかつた。彼はただ手を組んで胸に置き、ブツブツと「どうかご教示を、どうかご教示を」。彼は突然また思ひだした、「これは良い機会じゃないか。二度も行つたのに会えなかつたが、今や彼が訪ねてきたのだ」。

ある種の衝動で彼は言つてしまつた。「先月の——」ここまで言つると又もや決まり悪くなり、縮まりこまつてしまつた。（葉聖陶「飯」「まだ頂いていない半分の給与をお渡し下さい」の語を呑み込んでいる）

宝玉は笑つて、「いやまつたくだ。聞いているのがおもしろくてそちらに気を奪われ、黛玉さんの気疲れのことはつい忘れていたのさ」。黛玉も笑いながら、「いいえいまみたいな話をするのは結構気晴らしになりますの。別に気疲れがするということのほどではありませんわ。ただ私が一人相撲のおしゃべりをしてみたところで、あなたにはほとんどわかつていただけないのではないかと、それだけが心配ですの」。「なあに時間はかかつてても無論わかるようになりますとも」。宝玉はそう答えると、さつと立ちあがり、「いやほんとうに黛さん休んで下さい。それで、明日にも探ちゃんと惜ちゃんのところへ行つて聞かせてやり、あの人たちに揃つてお稽古をさせましょう。わたしは聞き手に廻らせてもらいますからね」。黛玉は笑いながら、「それではあなたもあまりに楽すぎましょうよ。たとえみなさんがお稽古を積まれて弾じこなせるところまでゆきなさつたとしても、肝腎のあなたがおわかりにならないとあつては、全くもつて——」（『紅樓夢』第八十六回 これもまた「全くもつて——」の後に「牛に琴を聞かせるようなもの」の語を呑み込んでいる）

五年……諸侯及び相将たちはあいともに漢王を尊んで皇帝とすることを願つた……漢王は三たび譲つたが、やむをえず、「諸君達がどうしても都合が良いとお考えで、国家に有益だとするなら——」と言つて、二月の甲午の日に汜水の北で皇帝に即位した。（『史記』高祖本紀「国家に有益だとするなら」以下に許諾の言葉を呑み込んでいる）

言葉を呑み込んですべては述べないこれらのものは、概ね話の流れからその意味を推察することができる。すなわち所謂「言外の意を知る」ものである。とはいえ、その言葉を補うとなると、非常に難しい。なぜならば、それぞれが呑み込んでしまつた部分は複雑な話となる部分か、すくなくとも、この跳脱表現を用いてしまつと話がかかり複雑だと想像させてしまつからである。もし数語程度で補なつてしまつたら、逆にそもそもの表現がもつ豊かな含蓄に及ばないと思うだろう。『史記』の例は、『漢書』では「諸侯たちが幸いに天下の民にこれを有益だとされるのであればそうする」と改め、比較的整つた形になっているが、漢の高祖が皇帝位を譲られた時のためらう複雑な心境は、かえつて『史記』の表現から来るリア

ルさには及ばないように思われるのは、まさにこのためである。

第二は突接である。これは、話の流れの途中で突然前の話にもどったり、あるいは突然その当時の心配事を話してしまい、その結果、話の流れが折り曲げられて文脈が素直に続かないものである。

晋公は亡命中の従者に賞を賜うたが、その一人介子推は功を申し出ないから賞もない。……するとその母が言った「それならば、(そのことを) 殿様にお知らせしたらどうかね」、「言葉は身の飾、と申します。引っこんでしまう身には飾りも何も要りませぬ——それはひけらかすことになります」。(『左伝』僖公二十四年「それはひけらかすことになる」は「お知らせしたらどうかね」を受けた言葉である。その意味は「もしお知らせするならば、ひけらかすことになる」といったのだ。従って「飾りも何も要りませぬ」とはつながらないのである。)

晋の献公がその世継ぎの申生を殺害しようとした。公子の重耳は彼に言った、「あなたはどのように自分の心を献公に打ち明けないのか」。世継ぎは言った、「それはできない。君主は驪姫に安心しきっている——そんなことをすると献公の心を傷つけてしまうからだ」(『礼記』檀弓上「それは献公の心を傷つけてしまうものだ」は「自分の心を献公に打ち明けないのか」を直接うけるものであるから、「君主は驪姫に安心しきっている」の後ろに続くものではない。言いたいのは「もし私の心を献公に打ち明けてしまえば、それは献公の心を傷つけてしまうからだ」ということだ。)

子夏はその子を失ってより視力も失った。曾子が弔問して、言った「私はこう聞いている、友人が視力を失ったときはその人のために哭すものだ」と。曾子は哭した。子夏もまた哭し、言った「天よ、私に何の罪が有らましようか」。曾子が怒っていった「商(子夏)よ、お前に罪がないはずはない。私がお前と共に孔子に洙泗の土地で事えてから、引き下がって西河のほとりに日を過ごした折、西河の民にお前が孔子だと思込ませたろう、これがお前の罪の一つ目だ。お前の親が亡くなったとき、人々にその知らせを伝えなかった、お前の罪の二つ目だ。子を失って視力を失ったこと、これがお前の罪の三つ目だ。にもかかわらず——お前がなんで罪がなかるうか」(『礼記』檀弓上「お前がなんで罪がなかるうか」も「私に何の罪が有らましようか」を直接受けるもので、「にもかかわらず」の文は屈折に使われ不完全に終わっている。つまり「にもかかわらず、自分に罪がない

などという、お前になんで罪がなかるうか」と言いたいのである。)

馮唐は、祖父は趙の人だったが、父のときに代に移った。……唐は有名な孝行者で、中郎署の署長となった。……文帝が輦で署に行ったとき、唐にむかって、「御老はなんで郎になっているのじゃ。郷里はどこだ」とたずねた。唐がありのままを詳しく答えると、文帝はこう言った。「わしが代におったとき、わしの食事係であった高袞が、よくわしに趙の將軍李齊の偉さや、かれが鉅鹿城外で戦ったときのことなどを話してくれたものじゃ。いまでもわしは食事のたびごとに、心が鉅鹿へはせるのを、おさえることはできぬ。御老はこのことを知るとるかの」。唐は応えて「やはり廉頗や李牧の名将ぶりにはおよびませぬ」……帝は廉頗や李牧の器量のほどを聞き終わるとたいそう喜んで股を叩きながらこういった。「ああ、わたしだけが廉頗や李牧のような將軍を手に入れることができぬのじゃ——わしはなんで匈奴のことなど気に病むことがあろうかや」(『史記』馮唐列伝。「わしはなんで匈奴のことなど気に病むことがあろうかや」はその時の心配事を直接受けている。なぜならば、当時の文帝は、まさに以下の文にいうように、「夷の侵入に思い悩ん」でいたから、この突然の言葉がでたのである。言いたいことは、「ああ、わたしだけが廉頗や李牧のような將軍を手に入れることができぬのじゃ、もし今彼らがわしの將軍であったら、わしはなんで匈奴のことなど気に病むことがあろうかや」である。)

孝文帝が即位してから数ヶ月たって、公卿が太子を立てることを奏請した。竇姫の長男が最も年長であったので、立てて太子にし、竇姫を皇后に立てた。……竇皇后の兄は竇長君、弟は竇広国、字を少君と名づけた。少君は四五歳のときに、家貧しくして人にさらわれて売られ、家族のものはみなその所在を知らなかった。少君は十余家に転売されて宜陽にいたった。その主人のために山に入り炭を焼いていた。日が暮れてから、百余人が崖の下に寝た。崖が崩れて、寝ていたものをことごとく圧殺したが、少君ひとりだけは脱出して死をまぬかれた。そこでみずから占ってみると「侯になるだろう」とでた。その主人の家族にしたがって長安におもむき、竇皇后が新たに立ち、その家が觀津にあり、姓は竇氏であると聞いた。少君が家を去ったときはまだ年少ではあったが、その県名・姓、またかつての姉とともに桑をとって木から落ちたことを記憶していたので、それを証拠にして上奏した。竇皇后がこのことを孝文帝に言上したので、帝は召見していろいろ質問した。

少君はつぶさに解答した。果たして事実であった。……これを聞いて竇皇后は少君をいだいて泣き、涙とはなみずとがまじりあってこぼれた。左右に侍御していた人々はみな地に伏して泣き、皇后の悲哀をいや増した。かくて、あつく田宅・金銭を賜い、弟を公に封じて長安に居住させた。絳侯・灌將軍らが言った。「われわれが生きているあいだは、竇長君、少君の二人に、われわれの死命を制せられるだろう。二人の出身は賤微である。だからその守り役や賓客を選択しなければならぬ——また呂氏がおこしたような大事の再現になってしまう」（『史記』外戚世家「また呂氏がおこしたような大事の再現になってしまう」もまた当時の心配事を触接受けるものだ。そのころ呂後の実家の各呂氏が起こした問題がよくかたづいたところに、こんどは竇皇后の兄弟に大きな土地が与えられ、そのうえ「出身は賤微」でもあるので、またもや問題を起こすのではと心配になり、その時の心配事を直接受けるものとなったのである。つまり「その守り役や賓客を選択しなければならぬ、もししっかり行わなかったら、また呂氏がおこしたような大事の再現になってしまう」と言いたいのである。）

以上のような突然別の話が出てくる場合、もし説明した方が分かりやすいというのであれば、もとよりそれに相応しい前段の言葉を仮設の語として追加することができる。例えば「もしこれを知らせれば」などで繋いでも良い。しかしながら、これも本来の切迫した心情を簡単に損うものになってしまう。先の『左伝』僖公二十四年の例をあげよう。『史記』晋世家ではこれに「文之」の二字を入れ、「言葉とはその身を表現することだ。その身が隠れようとするときに、どこに自分を表現する者がいるというのだ。表現するとは顕れることを求めることではないか」に作る。形式的にはもとよりかなり整ったものになってはいるが、発話者の切迫した気持ちのほうもいささか失われている。

第三は岔断（話題転換）。これは第一の急収に見えるが実際は急収ではなく、また第二の突接に見えるが突接ではない。これは別の話、別の事柄が横から闖入してきて、その時話されていた内容が、分断されて不完全なものになったり、前後が続かなくなったものである。例えば『左伝』襄公二十五年に以下のようにある。

叔孫宣伯が齊におったとき、叔孫還が宣伯の娘を靈公に進め、この人が愛せられて景公を生んだ。丁丑、崔杼は景公を立てて自分が相となり、慶封を左相にした。そして国々の人々と公廟で盟い、言うには「崔・慶に味方せぬ者があれば——」、晏子は空を仰いで溜息をつき、「この私がひたすら君に誠を

ささげ、国のためにつくす者に味方しなかったならば、天が見ておられる」と盟って、血をすすった。（崔慶の盟の言葉は終わらないうちに晏子によって断ち切られてしまったので、杜預の注は「盟書には、崔・慶に味方せぬ者があれば天が見ておられる、とあったのだが、それを読み終わらないうちに、晏子が答えを引き取ってその言葉を変えたので、自分が血をすすったのだ」という。）

また、『荀子』堯問には以下のようにある。

魏の武侯は事業を計画してすべてうまくゆき、群臣は誰もそれに及ぶ者がいなかった。武侯は政堂より退出してからも嬉しそうな顔をしていた。呉起が進みでて、「今までに楚の莊王のことばをあなたに申しあげた者がおりますか。……楚の莊王は事業を計画してすべてうまくゆき、群臣はだれも及ぶ者がなかったとき、莊王は政堂より退出して悲しげな顔をしていました。……楚の莊王が悲しんだのにあなたは嬉しそうに——」武侯はためらいながら二度おじぎをして、「天はあなたによって私のあやまちを救って下さった」と言った。（呉起の話はまだ終わっていないのだが、武侯によって断ち切られている。）

また『史記』項羽本紀には以下のようにある。

項王（羽）はその日、さっそく沛公をとどめ、酒宴をひらいた。その席次は、項王と項伯が東にむかって坐し、亜父は南にむかって坐した。——亜父とは、范増のことである。——沛公は北にむかって坐し、張良は西にむかって侍した。范増はしばしば項王に目くばせする。そして腰に佩びていた玉珎を持ちあげては合図すること三たび。だが項王は黙然として応じない。（叙述の言葉の中に「亜父とは、范増のことである」の注釈が入り文が断ち切られる。）

また、『三侠五義』第十二回には以下のようにある。

二更の時分になると、英雄（展昭）は夜行の忍者服に着替え、灯火を吹き消し、しばらく耳を澄ますと、あたりは既に寝静まっている。そっとドアを開け、後ろ手に戸を閉め、入り口のカーテンは降ろしたままにして、屋根に跳び上がると、宿から離れて、花園にやってきた——距離は昼間のうちに既に計っていたので——遠近の見当をつけ、道具袋のなかから投げ縄を取り出すと、向こうへ力をこめて投げ——この技はまことに正確で——壁の先にかかるのと、レンガの先に足先を掛け、身を躍らせて飛び上がる。壁の先まで来て身を伏せた。（叙述の語が解説の語

で二回分断されている。)

以上の例はよく見られるものだが、これに比べて珍しいものとしては魯迅の「阿Q正伝」の中の表現法がある。

未荘では、日一日と人心が安定していった。城内から伝わってくる風説によると、革命党は入城はしたものの、別に大した変化はないとのことであった。知事閣下はやはり元のままで、ただ官名が変わっただけである。それから拳人旦那も、何とやらという——これらの名は未荘の人にはきいてもわからない——官職についた。兵隊の長はやはり以前の緑営軍准尉が当たっている。ただ一つだけ恐ろしい事件が発生した。それは、別に悪い革命党が何人かまじって乱暴をし、次の日からは弁髪を切りはじめたことである。何でも隣村の船頭の七斤がやられて、ふた目と見られないザマにされたという。しかしこれは、大してこわがるほどのことではなかった。未荘の連中はめったに城内に行かなかったし、また、たまに行きかけたものでも、さっそくその計画を変更しさえすれば、危険にぶつからずに済んだからである。折から阿Qも、城内の昔の友人を訪問する予定であったが、この噂を聞いたので、やむなく取りやめにした。

叙述される事柄は「知事閣下はやはり元のままで、ただ官名が変わっただけである。それから拳人旦那も、何とやらという官職についた」というもので、これがそもそも一文だが、未荘の連中はきいてもよくわからないため、作者は当時の未荘の人々の心情を書き出そうとして、その文を分断し、「何とやらという～についた」と「官職」を前後に分けたのである。

また、『水滸伝』第六回で魯智深が瓦官寺の和尚を詰問するとき、和尚の話を断ち切る書き方に以下のようにある。

魯智深がその前へ行くと、坊主はびっくりして立ち上がったが、「どうぞおかけなつて。いっしょに一杯やりましょう」智深は禅杖をひっさげたままいった。「おまえら二人、なぜ寺を荒らしたか」。「まあおかけになって、愚僧の話を——」。智深は目をむいて、「さっさといってみろ」。「——お聴き下さい。この寺は以前はずいぶん立派で、田地も広く雲水もたくさんいたのですが、それをあの廊下にいる老僧どもが酒を飲んで勝手なまねをし、金を持ち出して女にみついだりして、長老さまにもおさえがきかなくなったところを、逆に長老さまをたたき出してしまったのです。それでこの寺はすっかり荒れてし

まって、雲水たちも散り散りになり、田地もとつての昔にすっかり売ってしまったというしだい。わたしこの道人とがこんどこの住持になりまして、山門もちゃんと建て、伽藍も修復して、とまっているところなのです」。

和尚が言う「どうかお座り下さり、愚僧の話を聞いて下さい」がそもそも一文なのだが、魯智深が目を剥いて横から強引に「さっさといってみろ」と言ったので、作者は二人の言葉を一緒に書きだし、その和尚の言葉を途中から隔絶させ、「愚僧の話を」などの語を上文に置き、しばらく隔てて「お聴き下さい」を下文に置いたのである。このような隔て方は『水滸伝』以前ではなかったようである。従って批評家の金聖嘆はこれが「古来なかった珍しい事」とみなすことになり、「表現法が奇抜で、古来初めての事」と言ったのである。このような跳脱分断の会話場面は、もしそれを強引に補って真っ当な形にしたり或いは繋いでしまうと、やはりその時の緊迫した雰囲気容易に失ってしまう。例えば、『荀子』の例の中の呉起の最後の一言について、『呉子』凶国篇では「この点は楚の荘王の憂慮するところなのですが、君主はそれを喜んでいるので、臣下の私は密かに恥ずかしくなったのであります」と一文を補うことで、言葉は非常にまとまったものになっているけれども、「そこで武侯は恥ずかしくなり」、言葉の終わるのを待たずにあわてて間違いを認めた状況がいささか不明なものになってしまう。従って跳脱の形式は常に残余して真っ当ではないかあるいは途中で切れて続かないものではあっても、やはり増減を加えたり語順を変えたりはできないのだ。清の魏禧は彼の著書の『日録論文』のなかで、「古楽府が跳脱し断絶しているようにみえるのは昔の方法だとかつて言われたことがある。実にその通りだ。細かく読むと、言葉の流れは順序だっていないが、話の流れはちゃんと続いている。表現法に工夫があるので、読者が気づかないだけだ。とはいえそれでもひとまとまりを成しているものであり、上下の筋が切れて続かないからといって、増減することもできないし、順番を変えることもできない。それはなぜか。筋が続かないようにみえても、その言葉の長短起伏が、それぞれ自然に一つのまとまりになっており、掻き乱すことができないからなのだ。……これがわかれば文章が読めるものとなる」と言う。この言葉は古楽府についての専論だが、かなりの概括性があり、この表現法の説明として用いることができるだろう。

以上

翻訳参考資料（順不同）

平凡社、中国古典文学大系より

『孟子』『儒林外史』『唐代詩集』『史記』『戯曲集』

『紅樓夢』

平凡社、中国古典文学全集

『史記』『水滸伝』

平凡社、東洋文庫より

『魯迅「野草」全訳』『塩鉄論』『今古奇観』『夢溪筆談』

集英社、全訳漢文大系より

『莊子』『孟子』『戦国策』『墨子』『礼記』『孫子』『戦国策』『荀子』

明治書院、新訳漢文大系より

『大戴礼記』『大学中庸』『淮南子』『韓愈』『国語』朝日新聞社、中国古典選より

『大学・中庸』『易』

岩波書店、岩波文庫より

『紅樓夢』『阿Q正伝/狂人日記』

他

『旧約聖書』（岩波書店）

ワシリイ・エロシェンコ作品集1『桃色の雲』（みすず書房）

『杜甫全詩訳注』（講談社学芸文庫）

『魯迅全集』（学研出版）

『中国現代散文傑作選1920-1940』（勉誠社）

『蒼ざめた馬』（晶文社）

『商君書』（好並隆司「商君書研究」）

『韓非子』（筑摩書房 筑摩叢書151）

『目加田誠著作集』（龍溪書舎）・『文選』（筑摩書房、世界文学大系70）

『史記』（筑摩書房筑摩学芸文庫）

付録

「章句上の辞格」の当代における研究の進展

霍四通

『發凡』の後文の説明では、「章句上の辞格」とは、「言葉の配列を利用した修辞すべてをさすもの」（上海教育出版社本 250頁 復旦大学出版社本 200頁）というものである。以下、この8種の辞格の中国当代における使われ方と研究の進展について略述しよう。

一、反復

『修辞学發凡』では反復を「连接的」と「隔離的」の2種に分けている。中国当代の修辞学研究の中には「語音反復」と「語義反復」などの概念を示す者もいる。語音反復とは、単音字の発音の反復を含み、また同子音の反復（例えば双声の「柳林liulin・齐秦qiqin」など）、同韻の反復（豊韻、押韻）、多音節語の発音の反復（例えば「保鮮豆芽不保険baoxian douya bu baoxian」新鮮なもやしが新鮮だとは限らない）及び文の発音の面での反復（例えば「期貨qihuo? 欺貨qihuo?」先物? 詐欺物?）が含まれる。意義の面での反復には数目語、方向語、色彩語、反義語と同義語の相互の対応が含まれる。

陳望道が挙げた例句から見るに、語音反復と語義反復の概念はともにその他の種類の修辞現象を兼ね備える傾向があり、それは現在の修辞学体系を混乱させるものである。例えば王希傑は、以下のように言っている。「重複して現れるものは修辞格と修辞方式を構成する一つの方式である。多くの修辞格（修辞方式）は重複という基礎の上に打ちたてられているもので、例えば押韻がそうだ。しかし、押韻をもって“反復”だと呼ぶことはできない。「関係したり類似したりする要素が重複して現れる特徴を持つものが、みな反復修辞格とは呼べるわけではない。そんなことをすると、反復修辞格が消えてしまうことになって、共通する特徴を探しづらくなるし、整えられた修辞格の体系を掻き乱す事になりかねない」¹

中国の「文化大革命」の時期には、反復は高頻度で使われた修辞格である。刁晏斌「文革」言語中の反復辞格」（『運城学院学報』2008年第1期）は以下のようにこの現象をとりわけ指摘したものとなっている。

- (1) 「蒼茫たる大地に問え、主導権は誰にあるのか？」
「我々！我々！我々だ！！ 我々の広大な工農兵の群衆が新世界の当然の主人公なのだ！」これこそが広大な革命群衆の響き渡る声なのだ。（1967. 1. 22）
- (2) 全国無産階級革命造反派は連合して、百戦連勝の

¹ 王希傑「从反復说修辞格研究的一些问题——张晓、徐广洲〈反復新论〉序言」、『赤峰学院学报』（汉文哲学社会科学版）2005年第4期。

毛沢東思想の導きの下、徹底的に旧世界を粉みじんにして、真っ赤な新世界を作り出すために、闘え！闘え！！闘うのだ！！（1967. 1. 30）

二、対偶

対偶とは漢語文化の中で独特な、また大変よく使われる辞格である。今日に至るまで、この修辞の伝統は連綿として続いている。当代の著名な作家韓少功が言う、「農村に行けば、中国全体で一番大きな文学活動は対聯であることがわかる。世界の絶景と言うべきであろう」²

しかしながら、『修辞学発凡』には対偶に否定的な傾向を一定程度持っている。これはこの書の制作が新文化運動という大きな背景の下にあったのが主な原因である。『発凡』は当時対偶運用上に存在した問題を批判している—「たとえ“五四新文化運動”前後であってもまだ強引に対偶法を使って判決を下したり、電報を打ったりする者がいて、極めて不自然な感覚を与えていた」。これは対偶を用いるときは言語使用の環境に随うべきであり、過去のように対偶を言語表現を雕琢する基本的な手段としてはならず、「主題や表現内容にふさわしくあるべきことを求める全体的な原則の実現を人々に注意するものなのである。

張弓の『現代漢語修辞学』（天津人民出版社1967年版）では対偶の定義、作用、分類、運用に詳しい論述をしている。そこでは「対偶文と言語の各要素の関係」「対偶文と対照文の違い」「対偶文の発展」などの問題が検討され、「対偶の特徴は「対称」である。その対称の特徴は「対立」である」こと、「対偶文の発展は、民族が対称の美と漢語の単音節双音節語に注意することと関係がある」と指摘している。これらの特徴のまとめは、後人の対偶研究に重要な指導的役割をはたした。近年出版された対偶研究の専著に朱承平の『対偶辞格』（岳麓書社2003年版）がある。この本は374の伝統的対偶格の基礎にたち、現代修辞学理論に照らしながら、詩詞の修辞上の異同によって、音法、字法、句法、兼格、章法及び意境などの面に従い、99の対偶辞格を導いていて、かなり整えられた対偶辞格体系を打ちたてている。

当代の学者は美学、哲学、文化等それぞれの領域がもつ漢語対偶への基礎的理解から研究を展開している。ある学者は、対偶とは主に形の面に着目した辞格で、美学的観点から分析すれば、対象と均衡という美学上の原理に基づくものだと考える。対偶は対称や均衡なものと同

様に、形がきちんと整えられながらも、またそこには変化がある。整然とした中に変化が含まれることで、整然さと変化が調和して一つの統一体を作り、調和の美感を与えるというものだ³。またある学者は、漢民族文化の中で対偶が大に行われるのは、中国の古代哲学にある認識論と方法論を基礎にしているからだ⁴と考える。中国の古代哲学思想には豊かで素朴な弁証法の合理的な要素がある。『周易』に見られる陰陽、乾坤など、その後の天人、形神、名実、有無、本末、体用、剛柔、善悪、礼法、理気、道器、知行など無数の対立する範疇があり、それぞれ漢語の対偶形式の十分な発達のために思想的基礎を与えてきたからだ⁵。多くの研究者は、漢民族の思维形態は事理の正反両面及びその相互依存、相互誘発、相互調和、相互転化などの関係に注意して、対偶修辞方式の中に体現してきたと考えている。「対立の統一」などが対偶辞格に深く浸透しているのだ。「太極図式こそ対偶修辞格が生まれきた心理的基礎の原型だ」とはっきり述べる学者もいるくらいである⁵。

三、排比

排比は日本の修辞学の著作の中では独立した辞格ではない。なぜならば形式上の「句調」の反復であり、「反復法」に入れればよいからである。もし、排比の文の中に語義上の通進があるならば、「漸層法」に入れられる。

『修辞学発凡』は言う：「排比格の中にも二句のみを排比するものがある。これは対偶と極めてよく似ているので、対偶を参考にするのがよい。例えば、

（十）私が想う人は 遠い遠い所にいる。

私が心を動かした事は 深く深く懐中にむすぼれる
（白居易「夜雨」詩）⁶

しかし、現在行われている漢語修辞学の辞格体系では、排比は三項あるいは三項以上でなければならない。これは大きな違いである。排比は対偶の「拡大」や「発展」なのだろうか。排比は「対偶の拡大や発展」ではない。これらは別々の辞格なのである。修辞学の観点から見ると、排比の出現はかなり早く、甲骨の卜辞の中にも「西から雨が来るか、東から雨が来るか、北から雨が来るか、南から雨が来るか」とあるのだが、対偶に関係する資料でこれより更に以前のものは見つからないからである⁷。

正しく排比文のこの修辞特性によって、当代の各種の

² 「現代漢語再認識——作家韓少功在華東師範大學的講演」、『文匯報』2006年8月6日。

³ 馬瑞超「對偶的美學基礎」, 載『語文教學之友』1984年第12期。

⁴ 嚴北溟「論律詩對偶形式與辯證思維」, 『社會科學戰線』1982年第3期。

⁵ 閻海燕「太極與對偶——心理與修辞研究之四」, 『揚州教育學院學報』2002年第2期。

⁶ 『修辞学発凡』復旦版第165頁。

⁷ 袁暉「試論排比」, 載『安徽大學漢語言文字研究叢書・袁暉卷』, 安徽大學出版社2013年版, 第178頁。

文章スタイルの中では、中学生の作文から行政機関の各種報告の文書まで、大量に使用されることになったが、使用されるほど制限が消えて、使用者の低年齢化が起きている。これにより排比はマイナスイメージを持つ言葉にまでなってしまった。随って、2008年の政治協商会議で、作家の賈平凹が政府の行政報告を評価して、「報告はとても良い、排比表現が無かったから」と言ったのである。この言葉に皆驚いたが、多くの人々の共鳴と声援を引き起こした。確かに、「無理矢理に排比文を並べる」作文スタイルは、既に官僚的表現や決まり文句としての表現形式になっている。その一方、排比文はそもそも強い上からの目線を持っていて、高所から見下ろすこと山を動かし海をひっくり返すほどだ。上に立つ者はこの形式で権力の持つ威厳を表現するのが好きなので、排比は指導者が権力を見せびらかしたり、他人へ指示や命令を下す際の一種の象徴となってしまったのである。別の一面から見れば、中身が空で、何の実質性もなく、人々への関心も無いうえに、またなにかすぐれた視点があるわけでもない役人達の講話は、無理に排比文を並べて、体裁を整え、格調を高めて、そこにいかにも内容があるかのように思わせるしかないわけである。少なくとも一文一文と続けることは、まるでそこには才能や内実が立派にあるかの如くみえるからである。⁸

ある人は、「排比の若死」が中高生の作文中、取り分けて大学入試用の作文の中で作り出す災害のほうが、役人の世界の文章におけるよりも一層重大だと指摘しさえする。だが、現在の教育評価の体制もまたその援助作用を起こし始めているのだ。受験生達が「次から次へと続くように」排比文を書く情況に当たって、冷静に採点する教員の感覚は以下のようなのである。「私は排比文に文句は無いし、恨みなどもさらさらない。しかし、現在排比文を見るとつい言いたくなる……この世代は実に排比文をひどい目に合わせている、私は排比文の為に哀しみすら覚える」⁹。しかしながら、だからといって、我々は排比文を否定してしまう必要もない。中国の駢儷文に源を持つこの表現形は作文法上それ自体が罪であるわけでは決してないので、当然ながら適切で内容を持った排比文であれば、立派な伝達の効果を生み出せるだろうし、その整えられた対応表現によって伝達の効率は向上し、朗読しやすければ憶えやすく、人々の心を盛り上げる雰囲気や氣勢も作り出すことができるのである。排比文を無理に作ろうとはせず、排比のための排比としないようにすれば済むまでなのだ。

四、層遞

層遞とは言葉の配列を浅いところから深いところへ、低いところから高いところへ、軽いものから重いものへと、だんだんと階梯的に進めていく辞格である。当代では層遞形式に対する分析は一層細やかになった。ある学者は、層遞を「単式層遞」と「複式層遞」の二種類に分けた。複式層遞は二つの事柄或いは二つ以上の通増或いは通減の層遞である。例えば「力量が匹敵するくらいであれば戦うことができ、足りなければ逃げるのがよく、相手になりそうも無ければ避けるのが良い」（『左伝』）。「匹敵する」から「足りない」に至りさらに「相手にならない」まで、数が通減して行き、また「戦う」から「逃げる」に至りさらに「避ける」まで、方法上の通減が見られ、この二つの通減が条件と結果の弁証関係を作り出している。その複式層遞ではさらに「反復形式」、「並立形式」、「双通形式」に分けている。この「複式層遞」は通常分類の中では正におろそかにされていた領域だった。

排比に比べて、層遞は内容において一層の違いがある。並べられる語句あるいは文には、語義上必ず階梯差が存在するからである¹⁰。層遞の特徴は二つの面にある。第一に、層遞の辞格は三つの事柄あるいはそれ以上の事柄で構成され、語義上必ずや程度が進められていくべき空間をもつこと。この空間は、軽から重へでも、小から大へでも、近くから遠くでもかまわず、どんな範疇に属しようとも発展していく余地がなければならない。だからこそ、漸次進むことが論理的な裏付けを持つことになる。第二に、漸次進む最終的な目的は、盛り上がり形成するところにある。一連の観念や形象による修辞的配列によって、表現意図を順々に推し進め、一段一段と前進させ、一段一段とはっきりさせ、一段一段と深くさせて、最も大きな力のあるものを最後に置くのである¹¹。

五、錯綜

当代の修辞学の論著では、錯綜の種類を簡略化してしまうのが通常だ。主に単語の錯綜と文の錯綜の二種類にまとめてしまうのである。

錯綜とは変化にほかならない。『発凡』が初めの方で論じた反復・対偶・排比は共に整頓された美しさを強調しようとする辞格であるが、錯綜からは変化を論じ始める。変化とは、文章の見事さは変化にある、という変化だ。「文章は山を見るようなもので、平坦なものは好まれず」（袁枚）、千篇一律では良い文章になるはずもない。単調

⁸ 「刹利“硬湊排比句”的官场文风」,『中国青年报』2010年3月8日。

⁹ 徐国年「“报告很好,没有排比句”该引起的语文反思」,『语文建设』2010年第C1期。

¹⁰ 潘晓东「排比层递异同论」,『修辞学习』1984年第3期。

¹¹ 康梅林、李鹏洲「层递辞格的特点和心理依据探析」,『襄樊学院学报』2007年第6期

な形式は興味を失わせ、読者の注意力を分散させ、立派なものを平板なものにしてしまう。修辞学には規則や規律があるのだが、修辞活動というものは、表現されるべき主張や表現内容に従って、読者の心理的な認知特徴をよく理解して、表現の形式を臨機応変に調節していく必要があるものだ。「錯綜」とは言語の使用上良くみられる。しかし、文章制作にあっては多くが作者によって意図的に為されたものであり、その運用に苦勞しているものである。なぜならば、作者がこの形式を使って手に入れようとするのは、整えられた美と不揃いの美が一つに融合された表現効果だからである。規則的な中に変化があり、対称的な中に非対称をその文が持つとき、それによって文章が活発化されて生き生きとし、言語の運用は見事な水準にまで達するのである。

修辞の本来のねらいは改変にはかならない。つまり新しいものを創りだすことだ。古代では、駢文のような規則性のある文の中に錯綜の手法を運用して不規則な感じを示したが、現代では、規則性を必要としない散文体の中に錯綜を用いることで、規則的に整えられた感じを示そうとしている。

六、頂真

頂針は、以前は「頂真」、「聯珠」、「聯語」、「蟬聯」、「通代」、「頂真統麻」などと称されたが、近代以来修辞学や文章学では「逐層通生筆法」とか「通句」等と称せられるのが常である。歴史は非常に長く、古代漢語の中ではごく一般的に使われ、「とても好まれる」ものだと行って良い。しかし、現代漢語の中では、一種の「文字遊戯」と見なされ、使用頻度も相対的に低くなった。

「頂針」の外延については、修辞学会ではずっと議論が続いてきた。濮侃『辞格比較』では、はっきりと「厳格な頂針」と「緩やかな頂針」の区別を挙げている¹²。ここで言う「厳格な」とか「緩やかな」というのは、繋ぎの要素、繋ぐ位置、繋ぐ回数による区別に基づくものである。『修辞学発凡』の定義では、繋ぐ位置や要素に対して条件を加えているので、厳格な形式である。「頂真とは、前の一文の終わりを次の一文の初めに用いることで、隣接する文が頭尾を繋げ、先に挙げられたものを後ろで受け取って続けて行く面白さをもつ表現法である」と言うからである。これに対して、胡裕樹主編の『現代漢語』のほうは、位置に限定がないので、緩やかな形式となる。「頂真とは前後するいくつかの文にある同じ語句で上下の二文を繋ぐもので、前句で次の句に繋ぎ次の句はそれを受けることで、結びつきを強くし、内容が

つながるようにし、流れるように聞こえる修辞法である¹³」と言っているからである。厳格なものに比べて、緩やかなほうは繋ぎの語句の位置に限定は無く、必ずしも前句の最後の語句でなくともよいし、用いる語句に多少の変化があってもよく、本来の語句そのまま使うというものでもない。とはいうものの、元の語句をそのまま使うのが基本である。

昔の典籍の中では、大部分の頂針が以下のような形式の頂真である。

(3)

氣というものは口を使えば言となり、目を使えば明となる。言は信によって名となり、明は時を以て動となる。名はそれによって政を成し、動はそれによって民を殖やす。政ができあがり人々が増えれば、なんと楽しいことではありませんか。(『周語』下 單穆公諫景王鑄大鐘)

現代では通常これを「双線頂針」と呼ぶ。初めの文が並列の複文で、以下の文は皆第一句のそれぞれの分句で継承し、平行して進み、「政ができあがり人々が増える」まできて二つの流れが交わる。中には多くの分岐を広げる「多線頂針」すらもある。『国語』の中では、多線頂針の例は至る所に見られ、一篇そのままがそうであるものもあり、そこでは話の進め方が厳密で、一気呵成に終わるものである。例えば以下の『周語下』單襄公論晋周将得晋国的一段がそうだ。

(4)

晋の公孫談の子周は、周に行って單襄公に使えていた。立つには傾かず、視るには脇見をせず、聴くには聞き耳をせず。言うには遠くへ話しかけたりしなかった。

敬を言えれば必ず天命に言及し、忠を言えれば必ず我が意中まで言及し、信を言えれば必ず我が身に言及し、仁を言えれば必ず人の身に言及し、義を言えれば必ず利に言及し、智を言えれば必ず物事の処理に言及し、勇を言えれば必ず節制に言及し、教を言えれば必ず弁別に言及し、孝を言えれば必ず神に言及し、恵を言えれば必ず親和に言及し、讓を言えれば必ず対等の礼に言及した。

晋国に心配事があればいつも心痛しないことはなく、慶事があればいつも喜ばないことはない。

最初の一段で述べられたものをめぐって下文ではそれを広げて行く。第二段では孫周の持つ十一種的美徳を述べ、第三段では晋周(孫周)の行為を述べて、孫周が後に必

¹² 安徽教育出版社1983年版、第141-142頁。

¹³ 上海教育出版社1995年版、第488頁。

¹⁴ 「秦人逻辑论纲」、『文化的语言视界——中国文化语言学论集』、三联书店上海分店1991年版、第314頁。

ずや国を手に入れるはずであり、従って彼を厚遇すべき必要性を論証するのである。

当代の学者は頂針は言語形式の一種であるばかりでなく、中国古代の思惟方式でもあって、論理上の聯珠推理と密接に関わると指摘している。聯珠推理とは、十分条件仮定推理であり、上古漢語の中にはこのような推理が大量にある。例えば、

(5)

国を正す者は、その計画が近視眼的であってはなりません。その計画は私恩に隠蔽されてはなりません。その計画が近視眼的だと民を教導できず、私恩に隠蔽されると、政は行われません。政が行われないなら、どうやって民を教導しましょうか。民を教導しないのは、君が無いのと同じです。そうなれば、近視眼と隠蔽とによってかえって害を受け、その君の身を苦勞させることになります。（『晋語八』陽畢教平公滅欒氏）

しかしながら、このような推理自体は厳密なものではない。朱曉農は「秦人のロジック」の語でこの頂針を利用した推理を概括している。例えば、「逸であれば淫となり、淫となれば善を忘れ、善を忘れれば悪心が生じる」と言うとき、「逸」であれば必ずしも「淫」というわけではないし、「淫」だとしても必ずしも「善を忘れる」わけではない。「善を忘れる」としても、必ずしも「悪心が生まれる」というわけでもないのであるから。¹⁴

七、倒装、跳脱

修辞史の著作には異なる時期の倒装現象に対するまとめがある。修辞比較の著書では、倒装と跳脱に英語の「inversion」（倒置法）および「aposiopesis」（頓絶法）に対応させて比較を行っている。この二つの辞格は、漢語の口語の構文法にみえる修辞的臨機応変性を非常によく体现するものである。『中国修辞史』（吉林教育出版社）の上冊では、倒置文、跳脱文、重語文などが口語における修辞の重要な特徴であると述べている。